中国の不思議な役人

話梅子　編・訳

中国の不思議な役人—目次

役人と出世の巻

実力？　幸運？　運も実力のうち？　役人の出世にまつわるお話

大器晩成　12
劉玉書の幸運　32
三世不遇　36
通州の書記　37
仁宗の手箱　42
心構え　44
薛姓　47
河泊所　49
憶えていた名前　52

役人と試験の巻

試験大国、中国では人生を決めてしまう…役人と試験にまつわるお話

蘇秀才　56
かんにんぐ　80
おなら秀才　83
叱咤　87
女学士　89

役人とわいろの巻

頼みごとに袖の下は当たり前！　役人とお金にまつわるお話

掛軸の謎　98
老教官と三人の娘と甥　108

誓い 138
新任 137
銭愚兄 135
態度を変える 133
十万貫の銭 131
干支 130
官職を買う 129

役人と名声の巻

拍手喝采、これぞ名役人！　民を思う見事な裁きにまつわるお話

木を裁く 156
鐘 154
生き仏 146

銭若水 178
断鬼石 177
仕官の道 175
検死 172
眉を描く 171
銅貨一枚 167
厠の踏石 163

役人と処世術の巻

役人は四方八方上手く立ち回るべし…役人と処世術にまつわるお話

勒保の経験 190
処世術 188
見かけによらない 184

王士俊 206
さそり太守 204
御製の詩 203
孔子 200
民情 198
巡撫代理の倹約令 194

役人と習性の巻

古今東西、役人気質は変わらない？　役人の習性にまつわるお話

官服を仕立てる 251
習性 250
慣例 248
海賊と秀才 246

合理化 261
女の力 260
官帽 258
中庸 257
鍵 256
閻魔王と役人 254

役人と犯罪の巻

悪いのは実は役人自身？　役人が巻き込まれた犯罪にまつわるお話

宋龍図 273
役人と盗賊 269
知事異聞 267
軍資金調達 264

官印剥奪 291
按察使の夜の顔 287
巧騙 280
忘恩 275

役人と異界の巻

神仙の国、中国では当たり前？　役人が遭遇した異界にまつわるお話

三つの封印 321
合格者の名簿 317
県知事の葬儀 315
王巡検の還魂 310
二人の役人 302
有能な顧問 296
血を浴びた幽鬼 326
一炊の夢 323

用語一覧

338

役人と出世の巻

実力？　幸運？　運も実力のうち？　役人の出世にまつわるお話

大器晩成

明の正統年間（一四三六～一四四九）のことである。広西桂林府興安県に一人の秀才がいた。姓は二字で鮮于、名は同、字を大通といった。八歳の時に神童に推薦され、十一歳で県の学校に入って奨学金で勉強する身となった。才能と学識から見ても、かの董仲舒や司馬相如にも劣らず、胸には万巻の書を蔵し、筆は千軍を払うほどであった。意気も盛んで、馮京や商輅のように三度続けて首席になることなど、袋の中の物を取り出すにも等しいことであった。本人はそう自負していたし、誰もがそう思っていた。

ところが、どういう運のめぐり合わせか、何度も科挙に挑戦しながら、どうしても合格することができないのである。幾度も幾度も試験を受けるうちに三十歳を越え、神童のほまれ高かった少年も一個の中年と成り果てた。長く学生を続けた者には、推薦を受けて国子監へ入学する道もあった。鮮于同にもその順番が回ってきたのだが、彼は自分の才能を自負していたので、これをいさぎよしとしなかった。それに国子監に入学すれば、奨学金を打ち切られてしまう。また、地方で試験を受ける方が中央で受けるよりも合格しやすかった。

「今度の推薦は断わろうと思う」

鮮于同は自分の考えを友人に話した。その友人は鮮于同の次に推薦の順番が回ってくることになっていたので、

「それなら、僕に譲ってくれないか。もちろんただでとは言わない。ちゃんと謝礼はするから」

と頼んだ。鮮于同も金がもらえるのなら、と譲ってやった。最初は情けから推薦を譲ったのだが、二度目からは謝礼を目当てに譲るようになった。続けて八回も譲ったおかげで、四十六歳になっても県の学校の学生のままで、自分の息子といってもおかしくないような若者達と机を並べて勉強していた。鮮于同のことを笑う者もあれば、憐れむ者もあり、また、親切心から推薦を受けるよう忠告する者もあった。鮮于同は笑うやつは勝手に笑わせておき、同情されても相手にしなかった。しかし、忠告された時だけは別であった。彼は憤然として言った。

「わしに推薦を受けろと言うのは、年を取っているから試験に合格することは無理だと思っているからだろう。ふん、君は知らないのか？　状元になるのは年を取ってからの方が多いのだ。宋の梁顥は八十二歳で状元になり、天下の読書人のうっぷんを晴

らしてくれたじゃないか。そりゃあ、わしだってちょっとした地位に甘んずる気なら、三十の時になれたさ。一生懸命へつらえば、少なくとも府や県の補佐官くらいにはなれただろう。また、結構な蓄えを作ることだってできたわ。しかしな、今は試験がものを言うご時世だ。たとえ孔子様でも試験に合格しなければ誰にも相手にされないし、田舎の農家の小せがれだって試験に合格すれば『先生』と呼ばれるのだよ。古い文章を適当に暗記して、阿呆な試験官にぶつかって、運よく合格しただけにせよだ。試験に受かって役人になってしまえば、こっちのもんだ。役人を再試験しようなんて考える者はいないからな。それだけじゃないぞ。役人の世界にも不公平なことがたくさんある。進士出身の役人ならば、少々でたらめをやったところで、誰も文句なんて言いやしない。しかしな、推薦組だとそうはいかない。いつも小さく縮こまって、卵を捧げ持って橋を渡るように気を配っても、上司は何かとあら捜しをしてくる。へまをやらかして弾劾されたって、進士出身者ならばちゃんと抜け道が用意されている。

『この者は官吏としての規律を乱したが、はじめての任官であり、また弱年でもあることを思えば、まだまだ改心の見込みあり。将来も考えた上で、その軽率をとがめるにとどめ、官位を下げることはしなくてよい』

ということになるのだ。二、三年もすれば、復職できる。金を使ってその筋に頼み

込めば、転任ですまされることもある。これが推薦組となると、一分の過ちが十分にされ、権勢のある人にでもぶつかれば、ここぞとばかりにいじめられる。立派に勤めていても、進士出身の役人の罪をかぶせられることだってある。同じ役人でもこんなに差があるのだから、進士に及第して役人にならなければどうにもならないだろう。推薦組になるくらいなら、このまま一生を学生で終え、死んであの世で閻魔様に不公平を訴えて、あの世で役人になった方がましさ。身を屈して低い地位にしがみつき、毎日毎日、人の顔色をうかがって、そのあげくに体を壊して薬の世話になるのはまっぴらだ」

鮮于同はますます信念を固くして試験に挑み続けたが、どうも運が向かないようであった。五十の坂を越えても、県の試験にさえ合格できなかった。試験の年がくるたびに、真っ先に願書を提出するのは鮮于同なので、受付の下役人にまで笑われるようになった。

天順六年（一四六二）、鮮于同は五十七歳になった。ひげも髪も白くなったが、相変わらず学生であった。孫といってもおかしくないような後輩達に混じって、学問や文学を論じる日々を送っていた。後輩達の中には鮮于同と話すと、その不運までうつ

るのではないかと恐れて逃げ出す者さえあった。

この年、興安県に新任の県知事が赴任してきた。新知事は姓を蒯、名を遇時、字を順之といい、浙江台州府仙居県の人であった。若くして進士となり、名声が高く、好んで古今の文芸を論じる才人であったが、一つだけ悪い癖があった。それは自分が若くして進士となったため、年寄りを軽んじることであった。蒯遇時は若者ならば大いに引き立てるが、年季の入った年寄りは役立たず扱いで、口では「先輩」と呼びながら、心の中では馬鹿にしきっていた。

かねてより、郷試に先立って県の試験を実施する旨が通達されていた。知事の蒯遇時が試験官となり、県内の学生を集めて試験を行なった。蒯遇時は自分の学識にたいそうな自信を持っていたので、名前を伏せて公平に答案を採点することにした。中に論旨が明快で、文章も歯切れのよい答案があった。蒯遇時はこれを選び出すと、得意そうに受験生達の前でほめ上げた。

「この答案はすばらしいぞ。このような者ならば、後の試験にも合格して進士になることまちがいなしだ。ほかの者も見習ってがんばるように」

受験生達はかしこまって蒯遇時の話に耳を傾けた。受験番号を呼ぶと、一人が返事をして人をかき分けながら出てきた。蒯遇時の前に現われたのは、ずんぐりとした体

に半分白くなったひげと髪、破れ頭巾につぎはぎだらけの着物を引っかけた、年老いた受験生であった。ほかでもない受験生の中で最長老、当年とって五十七歳の鮮于同であった。蒯遇時は颯爽とした若者を想像していたところへ、「先輩」と呼んで馬鹿にする年寄りが現われたものだから、あ然とした。

部屋中の受験生がどっと笑った。

「鮮于同先輩もいよいよ出世なさるぞ」

蒯遇時は恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にして黙り込んだ。どうやら文章を読みまちがえたらしい、そう思い直して心をしずめ、残りの合格者を発表した。こちらは皆、若い俊才ばかりであったから、蒯遇時の気も少しはおさまった。しかし、蒯遇時は役所に戻ってからも、何となく面白くなかった。

一方、鮮于同はようやく郷試を受ける資格を与えられて、喜び勇んで省城へ試験を受けに行った。ほかの受験生は省城に到着すると、皆、宿舎にこもって試験勉強にはげんだが、鮮于同はすでに何十年も勉強しているので、今さらやる必要もなかった。今までずっと勉強ばかりしていて、興安県の外に出たことがなかったので、毎日、街をぶらついていた。道行く人は鮮于同の姿を見て、

「あのおじいさんは息子か孫の受験につきそって来たんだろう。受験しない人は気楽

でいいね」
と言っていた。
八月七日になると、街では笛を吹き、太鼓を鳴らして、試験官を試験場に迎え入れた。鮮于同は郷試ははじめてなので、見物しに行った。『礼記』の試験官として蒯遇時が試験場に入るのを見て、
「蒯公のご専門は『礼記』か。わしと同じだな。だから、わしを一番にしたのか。きっと好みが合うのだろう。これはうまいめぐり合わせだ。今度の試験も十中八、九、大丈夫だぞ」
鮮于同はのんきにこのようなことを考えていた。しかし、当の蒯遇時の考えはまったくちがっていた。
「今度こそ若い者を合格させるぞ。若い者なら残りの人生が長い。きっと役人生活も長くなるから、何かと頼りになるはずだ。あんな年寄りを合格させたって、先は知れている。下手をすると、進士になった途端、うれしさのあまりぽっくりなんてことになるかもしれない。それでは何の役にも立たないではないか」
さらに、こうも考えた。
「この前の試験ではどうかしていたようだ。体がすぐれなかったのかもしれない。それで、鮮于同先輩のような年寄りを合格させてしまったのだろう。皆、私の年寄り嫌いを知っているから、えらい恥をかいてしまった。今度また、あの年寄りを合格させたら、物笑いの種になるぞ。よし、今回はまともでない答案を選ぶことにしよう。まともな答案を書くのは、長年勉強を積んできた年寄りと相場が決まっているからな。文体がめちゃくちゃで、意味も通らず、おっかなびっくりで論を展開して、見当ちがいの結論を導き出したものを選ぶことにしよう。そういうのは勉強をはじめたばかりの若い受験生のものに決まっている。学問は未熟でも、二、三回試験で世話してやれば合格するだろう。少しくらい回り道したってまだ若いし、何よりもあのいまわしい年寄りと縁を切れるからな」
そう考えが決まると、型どおり答案を調べて、できはよくないが、何とか最後まで書けているものをいくつか選び、合格点をつけて主任に提出した。主任はそれをすべて合格にした。
八月二十八日になると、主任は各科目の試験官とともに至公堂で合格者の番号と名前を発表した。『礼記』の首席は、
「桂林府興安県鮮于同」
となっていた。

蒯遇時は不思議でならなかった。蒯遇時の浮かない様子に主任が気づいてそのわけをたずねた。蒯遇時が、

「鮮于同は先の見えた年寄りですよ。あんなに何度も落第している者を合格させては、若い者が納得できないのではないでしょうか。ほかの者に取り替えたいのですが」

と答えると、主任は部屋に掛けてある額を指さして言った。

「あそこに何と書いてある。『至公堂』だぞ。年を取っているとか、若いとか、そんな理由で好き嫌いをしてはならない。昔から首席は年寄りが取るというではないか。きっと天下の学生達のはげみになるぞ」

鮮于同はこうして総合で第五位と判定された。もちろん蒯遇時は面白くなかったが、どうしようもなかった。蒯遇時があれだけ慎重に選んだのに、どうして鮮于同が合格したのだろうか。

実は鮮于同は八月七日に蒯遇時が試験官であることを知ると、今度の試験も大丈夫と、宿に帰って冷や酒をしたたかに飲み、腹をこわしてしまった。何とか試験場に入りはしたが、腹がしぶって文章をじっくり考える余裕などなく、適当に書いてそれですませたのである。本人はほとんどあきらめていたのだが、蒯遇時のまともな答案は取らないという方針のおかげで、『礼記』で首席合格を果たしたのであった。ちなみに興安県で試験に合格したのは、彼一人だけであった。

その日、合格者を集めて祝宴が催された。年齢の順に席につくことになっており、当然ながら鮮于同が第一席であった。試験官達は自分が取った合格者と対面して喜びをともにするのだが、蒯遇時だけは浮かぬ顔をしていた。鮮于同は蒯遇時が二度も自分の答案を認めてくれたことを恩義に感じ、たいそう丁重に接したが、蒯遇時はあからさまにそっけない態度をとった。鮮于同が都へ会試（かいし）を受けに行く時にも、型どおりのあいさつを受けただけであった。

翌年、五十八歳になった鮮于同は会試を受けたが、蒯遇時が試験官でなかったせいか不合格であった。鮮于同が蒯遇時のもとへ試験の報告をかねてあいさつに行くと、

「ここまで来たのだから、推薦を受けて官途につかれてはいかがか」

と、勧められた。しかし、鮮于同は四十年以上もの長きにわたって学生を続けてきたのである。一度の失敗ぐらいであきらめるはずがなかった。彼は郷試に合格したことをはげみに、ますます勉強に熱中した。地元で秀才達の勉強会があると聞けば、のこのこ出かけて行き、迷惑がられようが、馬鹿にされようが、まるで気にせず、皆に混じって文章を作るのであった。

三年が過ぎ、鮮于同は六十一歳になった。年こそ取ったけれども、まだまだ意気は

衰えておらず、都へ二度目の会試を受けに行った。ある夜、得意科目の『礼記』ではなく、『詩経』で首席合格するという夢を見た。目覚めた鮮于同は合格したい一心から、受験科目を『詩経』に変更することにした。

蒯遇時は興安県での治績を評価されて、都に呼び戻された。礼科給事中に任じられ、その年の会試の試験官に推された。

「私は二度も考えちがいをして、鮮于同先輩を首席で合格させてしまった。今度の試験ではもっと年を取っているから、まちがって合格させでもしたら、ますます恥をかくことになる。先輩の得意科目は『礼記』だから、今回は『詩経』を採点することにしよう。そうすれば、鮮于同先輩が合格しようがすまいが、こちらとは無関係だ」

蒯遇時は鮮于同が受験科目を変えたことを知らなかった。これこそまさに運命のめぐり合わせと言えよう。

答案を見る段になって、蒯遇時はまた考えた。

「『詩経』だからといって、若い受験生ばかりとは限らない。ここでも年寄りを合格させたのでは、採点科目を変えた意味がなくなる。大体、年を取って学識の深い者は経典に十分通じているが、若い者は『四書』ばかり勉強していて経典の意義にはあまりくわしくないはずだ。きっと答案もきちんと書けはすまい。少しばかり筆が立ち、

何とか体裁の整っている答案なら、若い者にちがいあるまい」

そこで、これなら大丈夫だろうという答案を選び出した。やがて合格者が発表されたのだが、『詩経』の首席は、

「桂林府興安県鮮于同」

であった。蒯遇時はもうあっけに取られるばかり。

「一体、どういうことなんだ。先輩はこれまでずっと『礼記』一筋で受験してきたはずなのに、なぜまた今回に限って『詩経』に変えたんだ？　わけがわからん」

そこで、鮮于同が合格のあいさつに来た折、受験科目を変えた理由をたずねてみると、

「『詩経』で合格する夢を見ました」

とのこと。蒯遇時はため息をついて、

「生まれながらの進士だ、進士になるために生まれついたんだ」

と、何度もつぶやいた。ようやく蒯遇時も鮮于同に対する態度をあらため、師弟としてのよしみを通じるようになった。

天子自らが行なう最終試験の殿試で鮮于同は第二組の首席で合格し、刑部の主事に任じられた。人は年を取ってからの合格なのにこれでは官位が低すぎる、と気の毒が

ったが、鮮于同は少しも不平をもらさず喜んでいた。
さて、礼部での蒯遇時は誰はばかることなく諫言したため、多くの人の恨みを買っていた。ある時、上奏文のことで宰相の劉吉と衝突し、劉吉にいらぬあら捜しをされて、勅命で刑部の獄につながれる身となった。その時、刑部の役人達は劉吉の機嫌を取ろうとして、しばしば蒯遇時を死地に陥れたが、鮮于同がそのつど阻止したため、命を永らえることができた。その上、鮮于同は同期合格の進士達に声をかけて、蒯遇時の助命嘆願の運動を起こした。その甲斐あって、蒯遇時は軽い処罰ですんだ。釈放された蒯遇時は思った。
「『大事に育てた花は枯れ、放っておいた柳は茂る』と言うが、まったくそのとおりだ。今回はこの柳に命を助けられたのだからな。あの年寄りを合格させなかったら、私はもう死んでいたことだろう」
そこで、鮮于同の官舎へ礼を述べに行った。すると、鮮于同は、
「私は三度も先生のお引き立てをこうむりました。この程度の尽力は、お礼のほんの一部に過ぎません。先生の天地のような大恩の前には、万分の一にも満たないものです」
と言うのであった。

その日、師弟二人はこころゆくまで酒を酌み交わした。以来、蒯遇時が郷里にいようと任地にいようと、鮮于同は毎年必ず人をつかわしてご機嫌伺いをし、わずかな俸給の中から贈り物をした。

鮮于同が刑部の中で異動を続けるうちに六年の歳月が過ぎ、ようやくどこかの府知事に任ぜられることとなった。朝廷では、鮮于同の品性と才能を重んじ、物事に老成しているところをたいそう評価していたので、吏部でももっとよい官位に推薦しようと考えていたのだが、当の鮮于同自身はそういうことにはまったく無頓着であった。
そこへ、仙居県から便りが届いた。蒯遇時の息子の蒯敬共が、富豪の査家と墓地の境界を争って喧嘩になった。たまたま査家の小者が行方不明となり、査家ではそれを蒯敬共が殺したと役所に訴え出た。蒯敬共はもちろん身に憶えがなかったが、申し開きのしようがなく、父親の蒯遇時の任地の雲南へ逃亡した。蒯敬共が姿をくらましたことから、役所では本当に査家の小者を殺したものと見なして、大勢の捕り手をさし向け、残っていた家族を捕らえて厳しく取り調べているというのであった。
鮮于同は台州府の知事に欠員があることを知ると、人を介して台州への転任を願い出た。吏部ではもっと高い官位につけるつもりであったが、本人の望みなので、早速、

鮮于同を台州府の知事に任命した。鮮于同が着任して三日も経つと、査家では鮮于同が蒯遇時の門下生であることを聞きつけ、蒯家の紛争を解決するためにわざわざ台州に赴任してきたのだから、えこひいきするにちがいないとして、役所内にあらぬ噂を流した。鮮于同は聞かないふりをし、また、蒯家の者が陳情に来ても面会しなかった。その裏では捕り手をあちこちにやって、査家の小者の行方を全力で捜させていた。

二ヶ月あまり後、査家の小者が杭州で捕らえられた。鮮于同が自ら取り調べると、小者は査家の人使いの荒さに耐えかねて逃亡したもので、蒯家とは何の関係もないことが明らかになった。そこで、小者を査家に引き取らせ、蒯家の家族を即刻釈放した。その上で、自ら墓地に出向いて、境界を実地に検分することにした。査家の方では小者が見つかったため、有力者を通じて鮮于同に穏便な処置をしてくれるよう願い出た。また、蒯家へも人を介して墓地の境界は譲歩するので、今までのことはなかったことにしてくれ、と頼み込んだ。

蒯家でも、事実が明らかになった今、無用の仇を作る必要もなかった。鮮于同も和解する許可を与え、査家には軽い罰を与えるにとどめた。

鮮于同は手紙を雲南に送って、蒯遇時にすべてがすんだことを報告した。蒯遇時はたいそう喜んだ。

「『荊を植えればとげが生え、桃を植えれば蔭になる』と言うが、まったくそのとおりだ。鮮于同という桃の木のおかげで、我が身も我が家も助かった」

そして、丁重な礼状を書いて、息子の蒯敬共に持たせて仙居県へ帰らせた。蒯敬共が礼を述べに鮮于同のもとを訪れると、

「長い間、世間から見捨てられていた私を引き立ててくれたのは、あなたの父君です。私は年ですから、大恩に報いないうちにあの世へ行ってしまうのではないかと、そればかり心配しておりました。ほかならぬ恩人の息子であるあなたが窮地に陥っているのを、どうして助けないでいられましょう。私がお役目についていたのを幸い、尽力いたしましたのは、先生が郷試の時にお引き立てくださったご恩に少しでも報いようとしてのことです。しかし、これくらいではまだお報いしたことにはなりません」

と言った。

鮮于同は台州で三年間知事を務めて名声を上げ、その後、徽寧道の道長に昇進し、続いて河南の司法長官に栄転した。八十歳になっても若い者に負けないほど元気であった。この年、浙江の巡撫に推された。鮮于同は、

「自分は六十一歳で進士に及第した。学生としては長く日の目を見なかったが、任官してからはとんとん拍子に出世して、何の波風も起こらなかった。その上、今度は巡

撫に昇って、栄誉を極めることとなった。これまで大過なくお上にご奉公したのだから、この機会に勇退するのが一番かもしれない。しかし、蒯公のご恩に、まだ十分には報いていない。今度の任地は蒯公の故郷に近いから、何かお役に立てることがあるかもしれない」

と考えて、謹んで辞令を受けた。

吉日を選んで出発し、数日間の旅を経て、浙江の省城である杭州に到着した。蒯遇時も副長官の地位にまで昇ったが、眼を患って政務を執ることができなくなっていたため、すでに退官して郷里に戻っていた。このたび、鮮于同が巡撫になったことを知ると、十二歳の孫の手を引いて、自ら杭州まで会いに来た。蒯遇時は師匠と呼ばれてはいるが、鮮于同より二十歳あまりも年下であった。しかし、すでに隠居の身で、その上、眼も見えず、杖にすがってよぼよぼと歩いていた。それにひきかえ、鮮于同は年齢こそ八十歳であったが、元気でぴんぴんしており、現役の巡撫である。出世がその出発の早い遅いとは関係ないことは、明らかであった。蒯遇時はこのことを考えて何度もため息をついた。

鮮于同は着任後、蒯遇時のもとへご機嫌伺いに人をやろうと思っていたところへ、本人が訪ねて来たものだから、大喜びで出迎えて私宅へ案内した。そして、師弟の礼で挨拶をした。蒯遇時は十二歳の孫を鮮于同に引き合わせた。

「私は閣下のご尽力で命を助けられ、息子の無実も晴らしていただきました。天地にも等しい大恩です。今また、幸いにもこちらにおいでくださいました。私はすっかり病み衰え、もう長くはなさそうです。息子は学問はまったくだめですが、孫の蒯悟(かいご)はなかなかに聡明なたちでございます。目をかけていただけたらと思って、連れてまいりました」

「私ももう隠居していてもおかしくない年齢なのですが、先生へのご恩返しがすんでおりませんので、厚かましくやってまいりました。お孫さんをお預けくださるとは、ご恩返しの好機でございます。お孫さんにはここで私の孫達と一緒に勉強していただこうと思うのですが、いかがでしょうか」

「そうしていただければ、私も安心して死ねます」

こうして、蒯悟に二人の童僕をつけて、役所の中で勉強させることになった。蒯遇時は孫と別れて帰って行った。

蒯悟はたぐいまれな資質を持っており、日ましに学力をつけていった。その年の秋、学政が来た時に、鮮于同は蒯悟を神童に推薦して学校へ入れて奨学生の資格を得させ、そのまま役所で勉強を続けさせた。

三年も経つと、蒯悟はすっかり学業を身につけた。鮮于同は、
「この子が進士になれば、先生のご恩に報いることができる」
と思い、三百両を蒯悟に学費として贈り、自ら仙居県まで送って行った。到着してみると、蒯遇時は三日前に病気で亡くなっていた。鮮于同は霊前でひとしきり慟哭(どうこく)してから、家族にたずねた。
「先生はご臨終に何か言い残してはおられませんでしたか」
蒯敬共が答えた。
「はい、亡き父はこう申しておりました。自分は不幸にも若くして進士に及第したばかりに、年寄りを馬鹿にして若い者ばかり引き立てていたが、そうとは知らずに閣下を合格させてしまった。その後、若い門下生を大勢送り出したが、賢い者もあれば愚かな者もあり、出世する者もあればしない者もあった。結局、誰一人力を伸ばしきった者はなかった。ただ閣下一人だけが、ここまで出世して、私のことを忘れないでくれた。子孫代々、晩成の人をあなどってはならぬ、と」
それを聞くと、鮮于同は笑った。
「私もようやく先生のご恩にお報いすることができました。世間の人も晩成の者でも役に立つことはあるのだから、年寄りをあなどってはならないことを知ったことでしょう」
そして、役所へ戻ると、老齢を理由に退官を願い出た。退官の許可が下りると、郷里の興安県に帰り、隠居生活を楽しんだ。毎日、子供や孫達に学問を教え、暇な折には、地元の長老達と酒を飲んだり、詩を作ったりしてのんびり過ごした。
八年経つと、一番上の孫の鮮于涵(かん)が郷試に首席で合格し、都へ会試を受けに行くことになった。ちょうど蒯悟も受験のため、上京していた。二人は子供の時に一緒に勉強した仲だったので、同じ宿で勉強した。やがて、結果が発表されると、二人とも合格で、両家は互いに喜び合った。
鮮于同は五十七歳ではじめて試験に合格してから、六十一歳で進士となり、官途を歴任すること二十三年、人臣の栄誉を極め、三代にわたる恩典を賜わった。老齢を理由に郷里に帰ったが、孫の合格まで見た上に、その後、九十七歳まで長生きした。ちょうど四十年の晩運であった。

（明『警世通言』）

劉玉書の幸運

劉玉書は生まれながらにして愚かであった。幼い頃から師匠について日に数十字を教わり、一日中唱えるのだが、何一つ頭に入らない。十四、五歳になっても相変わらずであった。父親は息子の行く末をたいそう心配した。

「こんなに愚かでは、先々、この子はどうやって暮らしていけばよいのか」

そこで、玉書のために献金して低い官位を手に入れた。将来、任官されて役人となれば、一生、食べていくのに困らないだろうと思ってのことであった。

成人した玉書はますます愚かになり、世事に疎くなった。歩く時には、定規で線を引いたようにまっすぐ歩き、角を直角に曲がった。人と話す時には、口ごもってしまい、ろくに言葉も出なかった。

それでも二十年経って、ようやく広東のある県の巡検候補に選ばれた。旧例では、官位の低い者が選ばれた時には、宮城の午門の外で三跪九叩頭して天子の恩恵に感謝することになっていた。しかし、今ではすっかりすたれて行う者はいなかった。

玉書は愚かではあったが、長く都にいたのでこのことを聞き知っていた。候補に選

ばれた翌日の夜明け前に、彼は早速、官服を着込んで、午門へ向かった。あいにくの雨模様だったが、玉書はずぶぬれになりながらも、ひれ伏して叩頭した。たまたま、さる親王が早朝参内のために輿で通りかかり、雨の中でひれ伏す玉書の姿に目を留めた。侍従に何者かをたずねさせると、

「新たに広東の巡検候補に選ばれた劉玉書です。天恩を謝して叩頭しております」

とのこと。親王は、変わったやつだ、と思った。

親王は朝房で、帝に拝謁するために上京していた両広総督と会った。玉書のことを思い出し、話の種にしようとした。

「そう言えば、広東の新たな巡検候補の劉なにがしという者が……」

名前を出したところで人が呼びに来たので、話はそれまでとなった。その後、総督は親王と会う機会のないまま、あわただしく任地へ戻った。同じ頃、玉書も広東に到着し、早速、総督に目通りした。総督は親王が玉書の名前を口にしたことを思い出し、

「殿下はいかがお過ごしかな。都を離れる時に、お会いできなかったから」

とたずねた。玉書は意味がわからず、ただ、

「はあ、はあ……」

と言うだけであった。総督は玉書が親王の知り合いだと思い込んでいたので、何か

と目をかけた。おかげで、玉書は着任後一年も経たないうちに、税務局の仕事を任された。ここは黙っていても懐に金の入る部署で、玉書も莫大な利益を得た。税務局での任期が終わって、総督に目通りすると、

「今の官位のままだとたいした役職にはつけぬ。いっそのこと献金して昇進したらいかがか?」

と勧められた。玉書は総督の言葉に従って、献金して県知事に昇進した。そして、俸給のよい役職を歴任し、たびたびの献金や推薦で、数年も経たないうちに道台に推薦された。玉書は帝の引見を賜わるために上京した。その際、総督は玉書に特産品と書状を託して、親王に届けさせることにした。

玉書は帝の引見を終えると、親王の邸を訪ねた。門番への付け届けを忘れたために、追い返された。

「殿下にお会いしたかったら、四更（午前二時頃）に来るんだな」

玉書は、

「はあ、はあ」

と言って引き下がった。そして、門番の言葉を真に受けて、四更に訪ねて行くと、ちょうど、親王が輿に乗って早朝の参内に出かけるところであった。玉書は輿の前に

ひれ伏して、総督の書状をさし出した。

親王が書状を開くと、時候のあいさつに加えて、

……先日ご推薦いただいた劉なにがしはまことに朴訥（ぼくとつ）で忠義に厚く、有能な人材です。このたび道台に推薦いたしました。

と書いてあった。どうやら玉書が親王と親しい間柄にあると思っているような文面であった。親王は総督とのやりとりをすっかり忘れていたので、

「さて、劉なにがしとは誰のことだったかな」

としきりに首をひねるのだが、思い出せなかった。

親王が帝に拝謁すると、ちょうど道台に一人欠員が出ているが、後任には誰がよいか、と下問された。親王も急なことで適当な人物を思いつかなかった。そこで、劉玉書の名を挙げたところ、すぐに任官の勅命（ちょくめい）が下った。

玉書は愚かではあったが、偶然のめぐり合わせにより、立身出世を成し遂げた。

（清『我仏山人札記小説』）

三世不遇

ある時、漢の武帝が宿直所へ出かけた。そこにあごひげも鬢の毛も真っ白で、みすぼらしい服装をした老人がいた。武帝が、

「そちはたいそう年老いているが、いつ役人になったのだ」

とたずねると、老人は言った。

「私は顔駟といいます。江都（江蘇省）の出身でございます。文帝の時に役人になりました」

「どうして年老いているのに、出世していないのか」

「文帝は文を好まれましたが、私は武を好みました。次の景帝は老いた者を好まれましたが、その時、私はまだ若うございました。陛下は若い者を好まれますが、私は年老いてしまいました。それで、三代の御世の間、不遇なのでございます」

（六朝『漢武故事』）

通州の書記

乾隆帝が東へ巡幸することとなり、直隷（河北省）の各地がその供応に当たった。供応はすべて細かな規定にもとづいてなされた。

天下は太平、天候にも恵まれ、すべては順調に進んだ。この役目で最も難しいのは、帝に随行する者達への供応であった。役人達は道理をわきまえているのだが、宦官についてはそうではなかった。支給される物品を二重取りしようとする者もあれば、他人の名をかたって請求する者もあり、何かと騒動を起こして供応に当たる役人達の頭を悩ませた。

随行の宦官に二十八と他他という者がいた。どちらも帝のそば近くに仕え、信頼を得ていた。帝の一行が通州に到着し、通州の知事が供応の役に当たった。書記が補佐を務め、酒宴や三度の食事はすべて規定にもとづいてなされた。もちろん宦官も例外ではなかった。

ある時、十数人の者が他他のもとから来たと称して食事を要求した。すでに他他達には食事の支給はすんでいた。知事が他他の名をかたってたかりに来たものと見抜い

て追い払うと、今度は一人の宦官とともに押しかけてきた。
「我らはお上についてはるばるここまで来たのだぞ。食事も出してくれぬとは、空き腹を抱えてお上にお仕えせよというのか。ここの役人には情けがないのか」
知事は、
「すでに規定の人数分の食事は出しましたよ。足らないはずはないでしょう」
と突っぱねた。すると、宦官は、
「外へ出る時には、誰でも何人か従者を連れて行くぞ。ことにお上の場合は、普段よりも大勢を連れて行くことだってある。それを規定を持ち出して拒む気か」
と言って、知事を袋叩きにしようとした。知事はほうほうの体でその場から逃げ出した。書記は知事が逃げ出してきたことを知ると、
「逃げてどうします。相手に足元を見られるだけですよ。放っとけば、あやつらに根こそぎかっさらわれてしまうでしょう。もし何もかもなくなったら、明日からどうするつもりです。お上の食事も出せなくなりますよ。そうなれば、おとがめを受けるのは確実です。職務をかけても、断固戦うべきです」
知事はすっかり怖気(おじけ)づいてしまい、戻ろうとしない。
「そんなこと、とてもじゃないけど、私にはできないよ。君、一つやってくれたまえ」

書記は人夫を数十人集めた。
「宦官に会ったら、私がどなりつけて打ちかかる。お前達はそれを合図に宦官を縛り上げろ。一切の責任は私が取るから、遠慮などいらないぞ。きっと、後でほうびをいただけるからな」
ほうびと聞いて、皆は喜んだ。
一方、宦官は知事が逃げ去ったのを見ると、皆を率いて支給品を収めてある天幕に入り込んで、金目の物を運び出そうとした。書記は天幕に飛び込み、どなりつけた。
「お前達、天幕で何をしている」
宦官は相手が身分の低い役人であることを見抜くと、居丈高(いたけだか)になった。
「何だ、小役人がたて突く気か?」
書記は、
「ここは我らの天幕だ。お前達は勝手に入り込んで、物を奪おうとした。さてはお前達、盗人だな。宦官のふりをするとは、盗人たけだけしいにもほどがある」
と言って、打ちかかった。それを合図に皆がいっせいに飛びかかった。多勢に無勢で宦官達に勝ち目はなく、あっという間に捕らえられた。書記は宦官を地面に押さえつけて褲子(ズボン)を脱がせると、尻を棒で二十回叩いてから、外へ放り出した。宦官は泣き

ながら逃げ去った。
宦官は書記の姓名を調べると、帝に泣いて訴えた。
「ひどい恥辱を受けました」
帝は書記を召し出すよう大臣に命じ、大臣が帝の命令を総督に伝えた。総督は書記を捕らえると、枷をかけて行宮の外につないでしまった。帝はいつまで待っても書記が来ないので、吏部の主事を総督のもとへやった。
「書記はどこです」
総督が行宮の外につないであることを告げると、主事は笑った。
「陛下は召し出せとお命じになられたのです。別に罷免しろとか、捕らえよとの仰せではありませんよ」
そして、書記を正装に着替えさせると、帝の前へ連れて行った。
「宦官達を打ち懲らしたというのは、そちか?」
帝の下問に書記は平蜘蛛のようにはいつくばって答えた。
「盗賊を捕らえるのは、臣の職務でございます。あの者達は天幕に入り込んで、財物を奪った悪党です。まさか宦官とは思いもしませんでした。臣は盗賊を働いた罪で、捕らえて打ち懲らしたのでございます。ただ一人の宦官のために、大清の法律を曲げ

ることは断じてできません。私は法律を遵守したまでです」
この答えに、帝は膝を打った。
「そちは正しいぞ」
そして、吏部尚書に県知事に欠員の出た県はないか、と下問した。吏部尚書は名簿を調べて、ある県の名前を挙げた。帝は、
「この者に県知事の職を授けよ」
と命じた。
「そちはこれより県知事として赴任するのだ。何があろうとも、民百姓を守って正義をつらぬけ。決して上司に屈服するでないぞ」
書記は帝に感謝の言葉を述べた。そして、任地へ旅立った。

（清『客窓閑話』）

仁宗の手箱

仁宗（じんそう）が宮中を散策していると、回廊で言い争う声が聞こえてきた。仁宗が興味を引かれてうかがうと、声の主は二人の衛兵であった。

甲が言った。

「富貴栄達はあらかじめ定められた運命によるものだよ」

すると、乙が、

「ちがうよ。宰相が明日には官位を剥奪（はくだつ）されて庶民に落とされたり、大金持ちが財産を没収されて一文無しになったりするのは、すべて天子様のご意志さ」

二人の衛兵は互いに主張を譲らなかった。仁宗はこのことを憶えておいた。

ある日、仁宗は金をちりばめた手箱（てばこ）に厳重な封印をすると、乙に命じて内東門へ届けさせることにした。乙は手箱を受け取って御前を退いた途端、激しい腹痛に襲われた。しばらくは我慢していたのだが、どうにも耐えられなくなった。そこへ甲が通りかかったので、代わりに手箱を届けてもらうことにした。

内東門の門衛が手箱を開けると、仁宗の書状が入っており、

「この手箱を運んだ者の労をねぎらって、官位につかせよ」

と書いてあった。乙が後からやって来て、

「急な腹痛に見舞われ、甲に代理をさせました」

と告げた。門衛がこのことを仁宗に上奏すると、

「手箱を運んだ者を官位につけよ」

との勅命（ちょくめい）が下った。結局、甲が役人に取り立てられることとなった。

（宋『独醒雑誌』）

心構え

山陰（浙江省）の史致光はもとの名を歩雲といった。乾隆四十二年（一七七七）に推薦されて教官となり、致光に改名した。祖母の周氏は若くして寡婦となり、善行を施すことを好んだ。かつて一族の者が墓地を争い、もう少しで殺人事件を引き起こしそうになった。周氏はこのことを知ると、着物と装身具を質に入れて金を作り、両者を和解させた。

史致光は乾隆五十一年（一七八六）に郷試に合格し、翌年には会試を受けることとなった。試験の前夜、不思議な夢を見た。神とおぼしき人物が現われて、

「汝の祖母は人の命を救った。その陰徳は軽くはないぞ。ゆえに汝を首席で合格させてやろう。汝が慎んでよく家を守れば、その前途ははかりしれぬものとなろう」

と言った。果たして史致光は首席で合格した。

史致光はあっさりとした性格で、長い役人生活を送りながら、書生のような素直さを持ち続けていた。道光二年（一八二二）、雲貴総督から都察院左都御史に転任し、都へ戻ることとなった。

時に、荊州太守の梁章鉅が郊外に史致光を迎えて、役人としての心構えをたずねたことがあった。

「そうですな、都だろうが地方だろうが、つねに二番目であろうと心がけることですな。また、自分をよく見せようとも思わないことです。後が大変ですからね」

梁章鉅はこの教えを胸に刻んでおいた。

翌年、梁章鉅は淮海道に抜擢された。史致光は引退して故郷へ戻る途中、清江浦（江蘇省）で梁章鉅と再会した。史致光は慇懃に握手して言った。

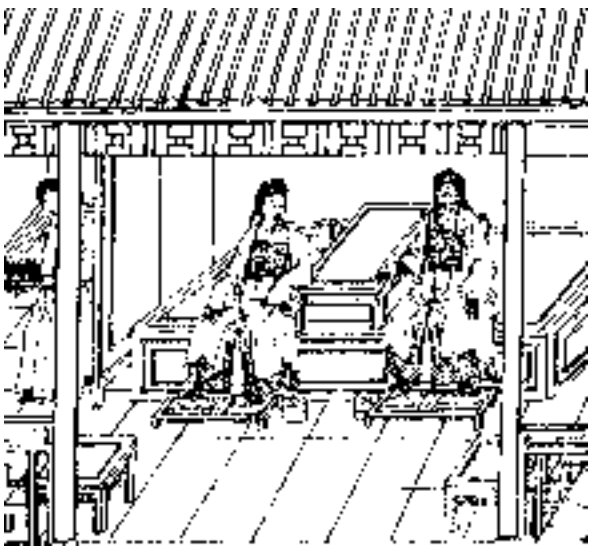
「荊州での話を憶えておられますか？」

「一日たりとも忘れたことはございません」

「私は先日、同じ言葉を蓮翁に聞かせたのですが、さっぱり手ごたえがありませんでした。さて、わかってくれたものやら……」

蓮翁とは河道総督の張文浩のことで、史致光とは親戚の間柄であった。河川工事に手腕を発揮し、治水についてしばしば上奏していた。

道光四年（一八二四）の冬、黄河が増水し、高堰（江蘇省）で堤が千丈（当時の一丈は約三・二メートル）あまりにわたって決壊した。張文浩はその責任を問われて新疆へ左遷された。



（清『北東園筆録』）

薛姓

張昌儀が洛陽（河南省）の県知事となった時のことである。一介の県知事に過ぎなかったが、則天武后に寵愛された張易之の縁者ということで、誰もさからう者がなかった。

ある日、薛なにがしという男が張昌儀に五十両を贈って、官職を授けてほしいと頼んできた。張昌儀は金を受け取り、男の持参した書類を、人事の担当者である吏部侍郎の張錫に渡した。

数日後、任官の手続きを取ろうとしたところ、書類が見つからない。ほかの書類と混じってしまったのであった。そこで、張昌儀にたずねると、

「ええと、誰だったかなあ。薛姓だったのは憶えているのだが」

と言う。張錫が調べると、薛姓の者は六十人あまりもいた。仕方がないので、その全員に官職を与えた。薛なにがしのおかげで、大勢の薛姓の者が官職にありつくことになった。

（唐『朝野僉載』）

河泊所

内閣に藍なにがしという下役人がいた。浙江富陽の人で、単身上京して数年前から内閣に勤務していた。

雍正六年（一七二八）正月十五日のことである。その日は元宵節ということで、同僚は皆、帰宅していた。藍は都に親戚もなかったので、一人、内閣に残って、月をながめながら手酌で酒を飲んでいた。

そこへ、突然、一人の男が入ってきた。男の身なりはたいそう雅やかで、容貌も立派であった。藍はてっきり内廷に勤務する宿直の役人だと思い、

「ご一緒にいかがですか」

と声をかけた。男はうれしそうに藍の誘いを受けて、向かいに腰を下ろした。男は藍にたずねた。

「官位は何かね」

藍は答えた。

「私はただの下っ端で、まだ官位はありません」

「名字は？」
「藍と申します」
「仕事の内容は？」
「文書の管理です」
「同僚は何人いるのかね」
「四十人あまりおります」
「ほかの者はどうしてここにおらぬのだ」
「今日は元宵節ですから、皆、帰宅して家族と過ごしているのです」
「どうして残っているのだ」
「都には親戚がおりませんもので。それに、誰かが残って文書の管理をしないといけませんから」
「仕事は楽しいかね」
「特に楽しいというものでも……。そろそろここの任期が終わるのですが、そうすれば地方の小さな役職につくことができます。今のところ、それだけが楽しみです」
「ほう、小さな役職でよいのか？」
「はい、広東（カントン）の河泊所（かはくしょ）に行けたらよいと思っております」

「河泊所はそんなによいのかね」
「海が近くて船舶の往来が盛んなので、俸給以外の実入りも望めますし……」
男は笑ってうなずいた。そして、数杯飲んでから立ち去った。

翌日、帝は朝議の席で、大臣達に下問した。
「広東の河泊所に欠員はあるか？」
「ございます」
「そうか、特別に藍という男を任命せよ」
大臣達は命を受けて御前を退出したのだが、藍がどういう男でどこに勤務しているのかわからない。皆で不審に思っていると、宦官がこう告げた。
「昨夜、陛下はお忍びで、内閣にお出ましになられました」
そこで、内閣に問い合わせると、確かに藍という下役人がいるという。その日のうちに宣旨が下った。藍は突然のことに驚くばかりであった。
後に、藍は府知事にまで出世したという。

（民国『清朝野史大観』）

憶えていた名前

乾隆（けんりゅう）年間（一七三六～一七九五）のことである。

河北広平県の県知事が帝に拝謁するため参内したところ、偶然、大学士の和珅（ホーシェン）と出会った。県知事はいそいそと和珅のもとに駆け寄って、うやうやしくひざまずいた。和珅が何度助け起こしても、その都度、ひざまずく。そうこうするうちに県知事の手が和珅が首にかけた朝珠（ちょうしゅ）に引っかかった。糸が切れて、朝珠は音を立てて床に散らばった。和珅はさっと顔色を変えて、その場で非礼をとがめようとしたが、

（こやつ、後で冷や飯を食わせてやるわい）

と思い直して、すぐににこやかな表情に戻った。

和珅は県知事の名前と役職をたずねた。県知事が答えると、和珅はしっかり胸に刻んだ。

数日後、和珅は帝に召し出され、政務について話し合った。その時、磁州（河北省）の知事に欠員が出たので、後任には誰がよいかと下問された。和珅は日頃から懇意（こんい）にしている者を推挙しようと思ったが、いつも一方的に機嫌を取られていたので、名前を憶えていなかった。

思い出せたのは、先日の県知事の名前だけであった。そこで、仕方なくその名前を挙げた。帝は和珅に同意し、県知事は磁州知事に抜擢された。

（清『埋憂集』）

役人と試験の巻

試験大国、中国では人生を決めてしまう…役人と試験にまつわるお話

蘇秀才

淮南に莫翁という金持ちがいた。二度、妻を娶ったが、息子はなく、三人の娘があるだけであった。先妻との間に生まれた長女は同じ村の地主の蔣大郎に、次女は県の下役人をしている韓提控に嫁いでいた。後添いとの間にもうけた三女は容貌あでやかで、すっきりとした眉に秀でた額、歯並みは白く、眼もつぶらで、人々から福相だと言われていた。その上、手先が器用で聡明であった。莫翁はこの三女をたいそう可愛がり、古い家柄の読書人に嫁がせたいと高望みをしていた。

その頃、県の学校の新しい入学者の中に、蘇という秀才がいた。祖父は推薦されて通判となり、父も秀才であった。古い家柄ではあったが、祖父は清廉な役人として一生を終え、たいした蓄えを残さなかった。父の老秀才も育ちがよいばかりで要領が悪く、秀才暮らしを長く続けるうちに、家産をすっかり売り尽くしてしまった。しかし、どんなに困窮しても書物だけは手放さなかったので、息子の教育には不自由しなかった。そのおかげで、息子は若くして秀才になることができた。

莫翁は蘇秀才が若く、風采も立派な上に家柄もよいことを知ると、仲人を介して縁談を申し込んだ。蘇老秀才は莫翁の俗物丸出しの考え方が気に入らず、一度は断わった。しかし、莫翁はあきらめず、何度も縁談を申し込んだ。結局、蘇家の方でも困窮する一方だったので、しぶしぶながら承諾した。

莫翁は、妻が嫁入り道具をたくさん持たせようとするのをたしなめた。

「あちらは読書人の家柄だ。派手なことは好まないだろう。後で、田んぼをいくらかやることにしよう」

蘇秀才と莫氏が結婚してまもなく、莫翁が中風で倒れ、帰らぬ人となった。長女と次女はあわただしく実家に戻ってくると、財産分与を要求した。二人の婿、韓提控と蔣大郎は結託して、勝手に遺産を分けてしまった。韓提控は家族を連れて邸に移り住み、蔣大郎は田畑から小作料を取り立てた。莫翁の妻は蘇秀才に訴状を書かせて、訴訟を起こそうとした。しかし、父の老秀才は息子に言った。

「書中にはおのずから黄金の家があるし、千石の禄米だってあるのだ。どうしてわざわざ争う必要があるだろうか」

蘇秀才は父の言葉に従い、莫家の遺産騒動にはかかわらないことにした。

蔣大郎は収穫した米を夏まで蓄えておき、値段が上がった頃に一石あたり一両三、四銭で売り、値段の下がる冬にはもうけた一両で米を二石買った。韓提控の方は金で

役所の書記の資格を買い、一年で昇進、二年で欠員の出た実入りのよい部署へ配置転換、三年の任期満了で栄転した。二人ともたいそうな羽振りで、蘇秀才のことなど眼中になかった。

一方、遺産の分与にあずかれなかった蘇秀才の家は日に日に貧しくなるばかり。二人の姉は意気揚々と言った。

「うちの人は蘇さんのように学問がないのは確かよ。だけど、学問が何かの役に立ったかしら」

やがて、親戚も寄りつかなくなった。ただ、莫翁の遠い従弟の莫南軒が、蘇秀才が金銭に少しの関心も持っていないことを知り、こう言った。

「この人はまちがいなく出世するぞ」

南軒の予言があっても、蘇秀才の運はなかなか開けなかった。悪いことは続くもので、同じ頃、蘇秀才の父の老秀才が死に、その葬儀に出費を余儀なくされた。続いて莫翁の妻が死んだ。長女と次女の婿は、

「妻の実の母親なのだから、あんたのところで十分な葬儀を出すのが当然だろう」

と言って、蘇秀才に立派な葬儀を出すよう要求した。こうして暮らしはますます困窮していった。

二度の葬儀を経て、蘇秀才の家はすっからかんとなり、家には書物が残るだけとなった。

蘇秀才は生活費を稼ぐために、家庭教師の口を探すことにした。しかし、蘇秀才の年が若いことから、たいした学問がないと思って、誰も雇おうとしなかった。南軒が駆けずり回って、ようやく周鴻臚の家庭教師の口を見つけてきた。生徒は周鴻臚の息子で、謝礼は一年で五、六両とあまりよくなく、その上、住み込まなければならなかった。しかも、生徒の周公子はとんでもないどら息子であった。机に向かうとすぐに、

「先生と二人きりで本をにらんでいると、落ち着かないよ」

と言い出す。そこで、友達を呼んで一緒に勉強させることにしたのだが、勉強の間中、遊んでばかり。朝、文章を作るよう与えた問題が、午後になっても一行もできていない。あげくに、こう言うのであった。

「先生、明日、やろうよ。酒でも飲みに行こう」

蘇秀才が許可しないうちに、周公子はさっさと勉強道具を片づけてしまう。仕方なく蘇秀才は酒の相手をするのだが、周公子は夜通し酒を飲み続ける。これには蘇秀才が音を上げた。しまいには、周公子が遊郭に遊びに行こうと言い出したので、蘇秀才は家庭教師をやめることにした。周公子は金の計算には頭が回り、しっかり日割りし

た分を謝礼としてよこした。それは最初に取り決めた謝礼の半分にも満たなかった。
そういうわけで、当面の生活費は莫氏の針仕事に頼るしかなかった。食事も一日一食となったが、蘇秀才は不満そうな様子も見せず、こう言うのであった。
「玄米の飯と野菜の吸い物は、儒者の常食だ」
妻の莫氏はあきれた。
「建前はそうでも、少しはお肉もほしいでしょう」
衣食から親戚へのあいさつ回りまで、すべての負担が莫氏の細い肩にのしかかった。
蘇秀才は学校に入ってすぐに父の不幸があったため、受験を一度、見送ることとなった。喪が明けて、次の試験を受けるために、師匠のところへあいさつに行くと、
「君なら大丈夫だ」
とはげまされた。科試の結果は首席であった。蘇秀才は南京で催される本番の郷試に向けて、真夜中まで机に向かって猛勉強を続けた。莫氏は夫が家庭のことにわずらわされないよう、細心の注意をした。そして、夜なべの内職をして、蘇秀才に試験場へ行っても恥ずかしくない身なりを整えてやり、滋養になる人参を買い求めて飲ませ、南京までの旅費を用意した。もちろん、内職だけでは足りなかったが、親戚からもらった祝儀で補えた。日頃、あれだけ冷淡にしていた二人の姉婿もたいそう親切にふる

まったので、莫氏は喜んだ。
試験も無事にすみ、蘇秀才は帰宅した。合格者が発表されるまでは、家でのんびり過ごすことにした。莫氏は夫が合格したら、もっと広い家に引っ越すつもりでいた。今までは夫婦二人だけで、訪れる人もなかったので、狭いとは感じなかった。しかし、今では親戚も出入りするようになったし、合格すれば祝いの客も訪れるだろうから、このままでは不便になるだろうと思われたからである。
合格発表の日、莫氏は玄関を掃き清めて、こざっぱりした身なりに着替え、吉報をもたらす使者を待った。通りを走ってくる人があると、扉のすき間からのぞいて見た。しかし、蘇秀才の家の扉を叩く者はなかった。やがて、合格者の名前がわかったが、蘇秀才の名はなかった。
「どうして、あなたより学問の劣る人達が合格したのよ」
恨み言を述べる莫氏を、蘇秀才はなぐさめた。
「あの人達でも合格できたのだから、三年後には私もきっと合格するよ」
蘇秀才は郷試にこそ落ちたが、科試では首席で合格しているので、少しは名が知られるようになった。次の郷試まで食いつなぐため、家庭教師の口を探すことにした。しかし、よい口は人が手放さないので、なかなか見つからない。自然、周鴻臚のよう

なところしか見つからず、長続きはしなかった。幸い夫婦二人の生活なので、切りつめれば何とかなった。それに蘇秀才は貧しい暮らしには慣れていた。

次の科試はいつもより早くめぐってきた。府や県では縁故のある者を受験させようとする動きがあったので、蘇秀才もやむをえず、府の役所に書状を提出して自分を売り込んだ。

「前回の首席合格者。年若く、青雲の志あり」

蘇秀才は府の受験者の名簿に入れてもらえたが、結果は成績を六等に分けたうちの第三等の二番であった。この成績では郷試は受けられそうになかった。しかし、科試が早かったため、一人が病気で死に、一人が服喪により、欠員が出た。そのおかげで、蘇秀は第二等にくり上げとなり、郷試を受けることができることとなった。

出発に際して、莫氏は言った。

「今度は二度目だから、要領もわかるでしょう。みごと合格してちょうだい。あなたが合格したら、あたし、土下座だってしてあげてよ」

「きっと、そうしてみせるよ」

蘇秀才が南京へ行っている間、家が無人となるので、莫氏には南軒夫婦がつきそうことになった。ある晩、莫氏は泣きながら目を覚ました。皆がどうしたのかとたずねると、莫氏は涙を拭いながら、

「夫が不合格になる夢を見ました」

と言う。南軒夫婦が、

「きっと逆夢だよ」

となぐさめたのだが、莫氏の心は落ち着かなかった。

翌日、蘇秀才が帰宅した。

「今回は勉強したところから三問も出たよ。五経は二つとも、前にやったところだった」

「叔父さんや叔母さんが逆夢だと言ったのは本当だったのね」

莫氏はようやく憂いを解いた。

こうして合格発表の日を迎えたが、やはり合格者の中に蘇秀才の名はなかった。莫氏は恥も外聞もなく泣きわめいた。蘇秀才もさすがに落胆し、深いため息をついた。

「ああ、また三年勉強しなければ……」

莫氏は眉をつり上げ、蘇秀才に指を突きつけて罵った。

「また三年ですって？　一体、何度三年待てばいいのよ！　いつまでこんな貧乏暮らしをしなければならないのよ」

蘇秀才は泣き続ける妻の世話を南軒達にまかせて、その場を逃げ出した。
莫氏は嘆き続け、蘇秀才の身の回りの世話を一切しなくなった。蘇秀才は塾の教師の口を見つけ、毎日、そこに泊まって家には帰らなくなった。莫氏との不和は蘇秀才の学問にも大きな影響を与え、勉強にも教師の仕事にも身が入らなくなった。成績は下がる一方で、皆に、
「蘇君ももうおしまいだね」
などと笑われた。
次の科試の時には、県の受験者の名簿から名前がもれていた。奔走して何とか名簿に名前を載せてもらったのだが、実際に試験場へ行くと、また名簿に名前がなかった。蘇秀才は郷試の直前に行なわれる補欠試験を受けることとなった。
いざ試験を受ける段になると、色々と物入りであった。蘇秀才は南軒に頼んで、少しでいいから金を出してくれるよう、莫氏を説得してもらった。莫氏は激怒した。
「あの人のことなのに、どうして叔父さんが頼みに来るの？　お金ですって？　あたしにはもう何も残ってないわ。あたしは、あの人のむだな試験のために、身ぐるみはがされたのよ。これ以上、一銭だって出すもんですか。あの人にくれてやるくらいなら、どぶに捨てた方がましよ」

南軒は二人の姉婿のところへ行って、金を貸してくれるよう頼んだが、
「うちだって苦しいんですよ」
の一言で退けられてしまった。試験の期日は迫っていた。南軒はもう一度莫氏のところへ行って、どうにか二、三両の銀子を出させることができた。
さて、蘇秀才が補欠試験を優秀な成績で合格すると、二人の姉婿がそろってやって来た。そして、南京までの旅費に、と少しばかりの銀子をくれた。蘇秀才は悲壮な覚悟で郷試に臨んだ。莫氏ははらわたをちぎられるような思いで、合格を待ち望んだ。
話はさかのぼるが、莫氏がまだ嫁いだばかりの頃、蘇秀才の将来を占ってもらったことがあった。その時には、若くして進士に合格し、官位は極めて高くなる、と言われた。莫氏はこの占いを信じて、ひたすら耐えてきたのであった。
今回も苦しい時の神頼みで、莫氏は占い師を呼んで今度の試験を占わせた。占い師は残念そうに言った。
「品性は清らかだが、位は高くはない。文名はあるが、出世は見込めない」
莫氏がたずねた。
「夫は合格できますか？」
占い師は首をふった。

「だめじゃな」
莫氏は絶望の淵に突き落とされたような心持ちになった。蘇秀才が帰宅したが、その顔には失意の色が浮かんでいた。それでも、莫氏は一縷の望みを抱いて、合格を知らせる使者を待った。蘇秀才は後の騒動を恐れて、今ではすっかり自宅のようになっている塾へ逃げ込んだ。結局、今回も不合格であった。
夫婦仲はますます険悪となった。莫氏は言った。
「あたし、もう、あなたとはやっていけないわ」
蘇秀才もいつも莫氏に罵られてうんざりしていたので、
「そんなにやっていけない、やっていけない、と言うのなら、よそへ嫁いだらいいじゃないか。私のような甲斐性なしでは、立派な男とは言えまい。三度の食事にだってこと欠くんだから、貧乏どころじゃないさ。しかし、どんなに貧乏しても一応は秀才だからね、道にはずれるようなことを口にしてはならないよ」
と、いやみを言った。
「口にするなですって？　よそのご主人をごらんなさいな。皆、堂々として羽振りがいいわ。それに比べたら、あなたなんてつぶれたスッポンじゃない。死んでるのと同じよ。よそのお宅はそれなりに楽しくやってる。それにひきかえ、あたし達はどう？

もう氷みたいに冷えきってるわ。こんなに貧乏になりながら、それでもあたしをよそへはやらないって言うわけ？」
蘇秀才は悲しそうな顔をした。
「私に連れ添って十年にもなりながら、これからの三年が耐えられないというのか」
莫氏は耳をふさいで叫んだ。
「やめて、やめて、もう、うんざり。この十年の間に、何度もあと三年、あと三年、と聞かされてきたわ。三年なんて言葉、もう聞きたくもない」
そう言い争っているところへ、次女の婿の韓提控がやって来た。
「このたび、今までの勤務態度と都への献金を評価され、江西新淦の県丞に任命されました。これで私も堂々たる役人です」
韓提控、今や韓県丞は八品の役人であることを表わす、濃い緑色の地に鶉の縫い取りをつけた官服を、誇らしげに着込んでいた。頭には紗の帽子、銀で縁取りした帯を締め、どこから見ても立派な役人であった。また、大きな日よけの傘や毛氈を抱えた小者も連れており、蘇秀才の小さな家はこれだけでいっぱいになってしまった。韓県丞が折りたたみの椅子を広げようとすると、蘇秀才が、
「これから塾へ戻りますので」

と言い、莫氏が、
「まだ顔も洗わず、髪も梳いておりませんから」
と答えるので、韓県丞は別れを告げて立ち去った。そこへ、長女の婿の蔣大郎が礼服姿でやって来た。蔣大郎ははくをつけたくて、韓県丞の仲立ちで秀才の資格を買ってもらった。今日はそのあいさつ回りをしているとのことであった。
莫氏は蘇秀才をにらみつけた。
「勉強なんかしなくたって、秀才にだって、お役人にだってなれるじゃないの。あなたはそんなに貧乏書生でいるのが好きなわけ？」
これには蘇秀才も反論できず、南軒のところへ行って、妻を落ち着かせるよう頼んだ。南軒が門をくぐると、莫氏が声を張り上げて泣いていた。
「全部、叔父さんのせいよ。あたしは叔父さんから読書人に嫁ぐことが一番の幸せだと聞かされてきたけど、この十年というもの、楽しいことなんて一度もなかったわ。着物だって二枚しかないのよ。ほかは全部、あの人の試験のために手放したわ。どうして、あたしだけつらい思いをしなきゃならないの？　あたしの人生、何だったのかしら。ああ、今からでも人生をやり直したい。叔父さん、お願いよ。あの人に、あたしを離縁するよう言ってちょうだい。あたし、よそへお嫁に行きたい。もう、我慢するのはいや」
「何を言っている。今の夫を捨てて、よそへ嫁いだりしたら、世間に笑われるぞ。お前も芝居で朱買臣の話は知っているだろう」
「会稽太守になった昔のえらい人でしょう。うちの人とは比べものにならないわ。あたしは朱買臣の奥さんみたいに、捨てた夫が立派になったからって、のこのこ出て行くようなことはしない。あの人が金持ちになってもあたしとは関係ないし、あたしが貧乏になってもあの人とは関係ないもの」
莫氏はそう言うと、奥へ引っ込んでしまった。
「わしの言おうとしていることを、まったくわかっておらぬな。いやはや、もう係わり合いは持ちたくないわ」
南軒は首を振りながら、立ち去った。家の奥からは、莫氏の金切り声がひびき渡った。
「死んでやる、離縁してくれないのなら、首を吊って死んでやる……」
莫氏と言い争いをしてからというもの、蘇秀才は二度と家に戻らず、ずっと塾で生活していた。ある日、近所の住人が塾に蘇秀才をたずねて来た。
「蘇の旦那さん、奥さんを放ったらかしにして、ご自分は塾に泊まりきりだなんて、

ちと無責任すぎやしませんか。騒動が起きたら、近所に住む私らに迷惑がかかるんですよ。そりゃあ、あんた方夫婦のことに、他人が口出しする筋合いのないのは、わかっております。でもね、あのまま奥さんを家に縛りつけておいても、いいことはないと思うんですよ。別に旦那さんが悪いと言ってるんじゃありません。奥さんもちょっと言いすぎです。いっそのことすっぱり別れて、それぞれ別の道を歩んだ方が、幸せになれるんじゃないでしょうかね」

蘇秀才は納得できない様子で、

「十年耐えられた苦労が、今になってどうして耐えられないというのだ」

と言うと、皆は言った。

「奥さんは旦那さんのその頑固さに耐えられないんですよ」

蘇秀才はしばらく考えてから、小さな声で言った。

「……好きなようにさせよう」

莫氏は近所の住人から蘇秀才の言葉を聞くと、南軒のもとへ相談しに行ったが、会ってもらえなかった。そこで、今度は仲人をやっている遠縁の叔母を訪ねた。叔母ははじめのうちは、

「よくお考えなさいな。本当に別れていいの？」

と思い直すよう説得した。しかし、莫氏がどれだけ貧しい暮らしを余儀なくされてきたかを訴えると、同情して涙を落とした。

「あなたもつらかったのねえ。わかったわ、きっと、いい人を見つけてあげますからね」

府の役所の正面に一軒の酒屋があり、主人は三十歳になっていたが、まだ独り身であった。叔母は以前から縁談を頼まれていたので、莫氏のことを話した。

「蘇秀才の奥様だった人よ。きれいだし、読み書きそろばんもできるわ。今回、蘇秀才が暮らしに困って、奥様を離縁なさったの。何といっても天下の秀才の奥様ですからね、こんないいお話、そうそう見つかりませんよ」

莫氏にはこう言った。

「立派な若旦那ですよ。続けてご両親が亡くなったものだから、ずっと喪に服していて、それでいまだに独り身なの。おまけにうるさい小姑もいないのよ。田畑もあれば、立派なお邸に、使用人だっているわ。お役所のお向かいで、酒屋を営んでおいでなの。使用人がいるから、あなたは奥様をやっていればいいのよ」

莫氏が承諾すると、叔母はその男を連れて来て引き合わせた。男は銀五分で買った紗の頭巾に、七銭で買った青い紗の着物、足には紅い鞋（くつ）といういでたちで、莫氏の目

には裕福な家の息子に見えた。互いに横目で相手を品定めしたのだが、男の方は独り身が長くて寂しい思いをしていたわけだし、莫氏も蘇秀才に苦労させられどおしだったものだから、すぐに相手を気に入った。その日のうちに結納を交わし、吉日を選んで婚礼を執り行うこととなった。

莫氏の叔母が受け取った仲人料を、蘇秀才に贈ろうとした。すると、蘇秀才は、

「この十年の間、私はあれに苦労ばかりかけてきました。このお金は、あれにやってください」

と言って、涙を落とした。

莫氏は嫁いではじめて、夫になった男には土地も邸もなければ、使用人もいないことを知った。叔母の口車に乗せられたのであった。男の持ち物は酒屋だけで、それも借家であった。使用人もおらず、莫氏は自ら帳場に出なければならなかった。しかし、自分でこの店を切り盛りすることができると思うと、さほど苦にもならなかった。

蘇秀才は莫氏がいなくなって、ようやく静かな生活を送れるようになった。しかし、莫氏が暴れた時に、書物は破られ、家財道具はめちゃめちゃに壊されてしまい、戻っても暮らすことはできなくなっていた。

南軒は蘇秀才を憐れんで、子供の家庭教師として家に住まわせた上に、一年間の謝

礼として十両を与えた。

蘇秀才は、決して莫氏の嫁いだ酒屋に近寄ろうとしなかった。意地の悪い学生仲間は、わざわざ酒屋まで莫氏の顔を見に行った。そして、蘇秀才のことをあざ笑った。

「女房一人抑えられず、そのあげくに望むままによそへ嫁がせるなんて、役立たずだなあ」

「ちょっとでも金のある家へ嫁いだってことは、あの奥さん、浪費家だったのかもしれないよ。蘇君ももてあまして、離縁したんじゃないかな。まあ、男に甲斐性がなかったってことさ」

中には莫氏を笑う者もあった。

「秀才を捨てて、酒屋とはね。まったく向上心のない女だよ」

「前の亭主を捨てて、すぐに新しい亭主を拾うってのも、薄情だね」

蘇秀才は後添いを迎えなかった。一つには暮らし向きが貧しいのと、二つにはまた莫氏のような相手を娶って苦労するのを恐れてのことであった。

二年が過ぎ、科試を受けることとなった。その頃、蘇秀才が県の学校に入学した時の県知事が、府知事として中央から赴任してきた。知事は蘇秀才が貧しさゆえに妻に捨てられたことを知ると、深く同情を寄せ、合格者名簿の前の方に名前を載せてくれ

た。おかげで、学政にも認められ、郷試を受ける資格を得た。
蘇秀才は莫氏がいなくなってからというもの、心わずらわされることなく試験勉強に専念することができるようになった。試験に合格できなかったばかりに、妻に捨てられたのである。努力しないで、何とする。彼は自分をふるい立たせた。
ようやく運がめぐってきたのか、郷試では合格者二十一名の中に蘇秀才の名前もあった。これには街中が驚いた。
「前の奥さんも早まったことをしたな。大官の奥方になる栄誉をみすみす他人に譲ったんだから」
口さがない人々は、莫氏のことをあざ笑った。莫氏の耳にも届いていたが、あえて知らぬふりを通した。
蘇秀才が郷試から戻ると、南軒は大きな家に引っ越した。門前には仲人が押しかけ、後を絶たなかった。退官して郷里に戻っている紳士の令嬢を勧める者もあれば、富豪の令嬢を勧める者もあった。
「ご承諾いただければ、たいそうな持参金をおつけになるそうですよ」
仲人は決まってこう言った。
実は蘇秀才はまだ莫氏のことを忘れていなかった。夜なべの内職をする莫氏の姿を

思い出して、不覚にもむせび泣いた。
「まだ試験が残っています。もう少し待ってください」
十一月に会試を受けるために上京した。二月に行なわれた会試にも合格し、天子自らが行なう最終試験の殿試では第二甲で合格し、みごと進士となった。
蘇秀才あらため蘇進士は、八月に淮南に戻ってきた。県知事が盛大に出迎えた。蘇進士はまだ三十歳ちょっと、まだまだ青年で通る年齢であった。
役所へあいさつに出向く途中、蘇進士は酒屋の前を通りかかった。
「清香皮酒」
と書かれた看板がかかり、帳場にはきれいな女が坐っていた。別れた妻の莫氏であった。蘇進士はその姿を見ると、つぶやいた。
「私が入って行ったら、一体、どんな顔をするだろう」
すぐに轎(かご)を止めさせ、従者に日傘を持たせると、官服姿で店の中へと入った。
主人は脇の部屋で短い袖なしを着て売り上げの計算をしていたが、突然、立派な役人が入ってきたものだから、あわてて店の奥に隠れた。莫氏はすぐに相手が蘇進士だとわかった。しかし、特に恥じ入る色もなく、少しも表情を変えなかった。蘇進士はかつての妻の莫氏に向かって、うやうやしくお辞儀をした。莫氏は、

「あなたはあなたでお役人になればいい、あたしはあたしのお酒を売るだけです」
と言っただけで、身じろぎ一つしない。蘇進士は自分も浅はかな行動を取ったものだと笑って、その場を立ち去った。
この時の莫氏の心情を、誰に察することができただろうか。無表情ではあったが、その心には大きな打撃を受けていた。夫を捨てたのはほかでもない莫氏自身であった。今さら愛想笑いを浮かべたところで、よりを戻せるはずはない。また、相手の衣に取りすがって自分の過ちをわび、同情を買って元のさやに収まることなど、なおさらありえなかった。莫氏は見苦しいところをさらすくらいなら、夫を捨てた女としての意地を通すことにしたのであった。
同郷に沈(しん)挙人という人がいた。父は進士出身で、府知事をしていた。これが蘇進士がまだ独り身でいることを知ると、仲人を通じて十八歳になる妹との縁談を持ち込んできた。話はとんとん拍子にまとまり、吉日を選んで婚礼を挙げることとなった。
婚礼の当日、役所の前には山のような人だかりができた。蘇進士の嫁迎えの行列が、ここを通るからであった。蘇進士が紅い婚礼衣装に銀の帯をしめ、紗の帽子に黒い靴といういでたちで、大勢の従者を引き連れて現われた。楽隊がにぎやかに演奏する中、蘇進士は意気揚々と通り過ぎて行った。

莫氏も店の前に立って、ぼんやりと行列をながめていた。見物人がこう言うのが聞こえた。
「運のいい花嫁だよなあ。立派なお役人の奥方様になれるんだから」
莫氏は頭を力いっぱい殴られたような衝撃を受けた。泣くことも笑うこともできなかった。苦しかった頃の思い出がいっぺんによみがえった。ああ、もう少しだけ我慢していたら、この花嫁が受ける栄誉はすべて自分のものになっていたのに……。
莫氏が帳場に戻ると、一人の若者が入ってきた。若者はニヤニヤ笑いを浮かべながら、
「酒を三斤おくれ」
と言って金を投げてよこした。数えてみると二斤半分しかなかった。
「お客さん、これじゃ足りませんよ」
莫氏が言うと、若者は懐を探って残りの金を払った。
「姐(ねえ)さん、せっかちだなあ。払わないって言ってるわけじゃないだろう。そうあせるから、せっかくの奥方様の座も逃すんだよ。あせりは禁物ってわけさ」
莫氏は顔を赤らめ、無言で酒を三斤、若者に渡した。若者は笑いながら、店から出て行った。莫氏は無言で帳場を離れた。

その夜中、莫氏はそっと寝床を抜け出した。そして、梁（はり）に腰紐をかけて首を吊った。

五更（朝四時頃）過ぎに目を覚ました夫は、莫氏の姿がないことに気づいた。呼んでも返事がない。捜しに行こうと起き出したところ、梁から下がる柔らかいものにぶつかった。莫氏の冷たくなった体であった。急いで下ろしたが、すでにこと切れていた。

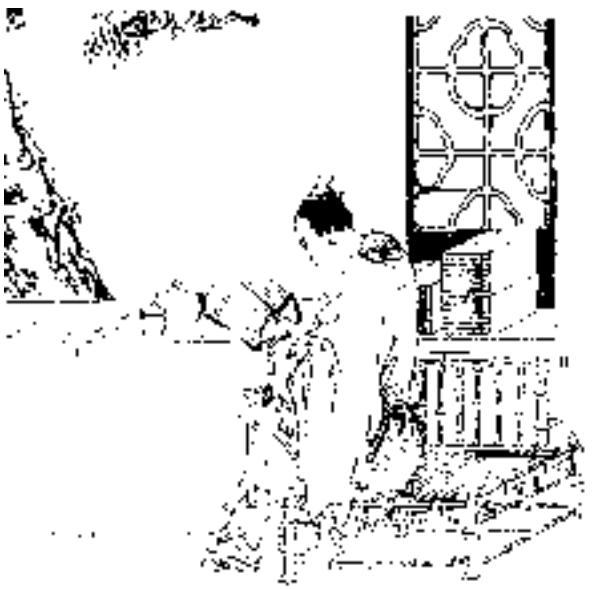
蘇進士は莫氏が死んだことを知ると、南軒に二十両の銀を渡して墓を作らせた。

「莫氏は思いつめたあげく、死に急いでしまいました。十年も連れ添ったのですから、悲しくないわけはありません」

その頃、長女の婿の蔣大郎は小作料の取り立てにからんで、殺人事件に巻き込まれた。蔣大郎は莫翁から受け継いだ土地を蘇進士に返して、とりなしを頼んだ。また、次女の婿の韓県丞も公文書を偽造したことが明るみになった。これも蘇進士にとりなしを頼んで、莫翁の邸を返してきた。

蘇進士は莫翁が自分を婿にしたことを忘れず、南軒の末子を莫家の跡継ぎにして莫翁の遺産を相続させた。また、南軒から受けた数々の恩を思い、その子に学問をさせた。

後に蘇進士は巡撫にまで出世し、妻との間に二人の子供に恵まれた。



（清『醉醒石』）

かんにんぐ

ある金持ちにたいそうできの悪い息子がいた。書物を読んでもさっぱり理解できず、文章を書かせてもまったく意味がわからない。県の試験を受けることになり、試験場には身代わりを送り込んだ。この身代わりが何と首席で合格したものだから、大騒ぎとなった。本人確認が厳しい場合は、試験官の下僕にわいろを贈り、代筆者が作成した答案を手渡してもらった。こうして、残りの四度の試験をすべて首席で合格した。

人々はこの不正を知っていたので、もう一度公正な試験をするよう要求した。試験官はこの要求を入れて、下僕も誰も近づくことのできない、完全に外部と遮断(しゃだん)された状況で再試験を実施することにした。

金持ちの息子はくまなく身体検査をされ、密室に入れられた。そして、答案用紙と問題は、試験直前に試験官が自ら運んだ。部屋は外から鍵をかけ、下僕には近づくことを禁じた。

正午に試験官が様子を見に入ると、金持ちの息子は机につっぷしてウンウンうなっていた。答案用紙にはまだ一字も書かれていなかった。試験官が、

「どうして書けてないのか」

とたずねると、

「いえ、文章は大体考えてはあるのですが、どう書き出そうかと悩んでおるのです」

と答えた。試験官は金持ちの息子を残して部屋を出ると、再び鍵をかけ、誰も近づかないよう厳しく命じた。

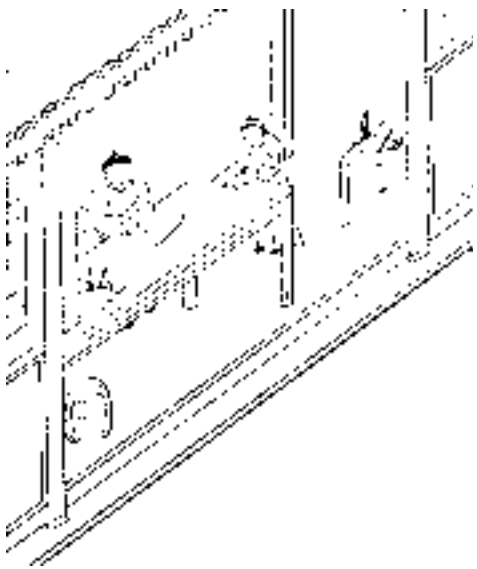
日暮れ近くになって、試験官が再び様子を見に行くと、答案用紙はびっしりと文字で埋まっていた。しかも、流れるような名文で、文意もしっかりしていた。試験官はこの答案を人々に見せて、不正はなかったと宣言した。驚いたのは、再試験を要求した人々である。いかなることかと、首をひねった。

後でわかったことだが、わいろを受け取った試験官の下僕が、試験官が試験問題を出した時に盗み見て、問題の内容を代筆者に告げた。代筆者は急いで答案を書き上げて下僕に渡し、下僕はその答案をこっそりと試験官の背中に貼りつけた。そして、試験官が様子を見に入った時、金持ちの息子は試験官が後ろを向いたすきに答案をはがして、書き写したというのであった。

試験官は、金持ちの息子が答案をはがそうとしてごそごそと身動きしたのを、わいろを渡そうとしたと勘違いして、

「立ち上がることはない、坐ったままでさっさと答案を仕上げなさい」
と言ったという。当の試験官に答案を運ばせるとは、たいした知恵である。

（清『仕隠斎渉筆』）



おなら秀才

臨潼（陝西省）に夏器通という学生がいた。頭のできがあまりよくなかったが、試験を目指して勉強していた。いつも模擬試験のたびに珍答を書くものだから、皆の笑い者になっていた。県の学校の入学試験では、古人の文章を丸暗記して何とかすべり込むことができた。次に学力試験を受けることになった。この学力試験でよい成績を取っておけば、推薦されて役人になる道も開かれているので、学生達は必死になって勉強した。

夏器通は自分の学力のほどはわかっていたので、きっと末席になると思った。たまたま街で占い師を見かけたので、占ってもらうことにした。まず、おみくじを引くと、

「聞けども声は聞こえず、見れども形はなし。必ずや功名を立てん」

と出た。占い師はもろ手を上げて、

「きっと首席で合格なさいますよ」

と祝福した。

夏器通はうれしくなって、同学に言いふらして回った。同学はあざ笑った。

「きっと目の見えない試験官が答案用紙のにおいをかいで、優劣をつけるんだろう。あまりにひどい成績だと罰を受けるから、君、せいぜい努力したまえ」

学政の某公が西安での試験を受け持つことになった。某公は出発に際して尚書のもとへあいさつに出向いた。尚書は西安の出身者であったから、誰か合格させたい者がいるかどうかたずねようとした。

「どなたか首席にしたい者があれば……」

某公がそう言いかけた時、突然、尚書が立ち上がった。某公が何事かと驚いていると、尚書は笑って、

「いや、何でもない。下気通（シアチートン）（おなら）だよ」

と答えた。某公は「シアチートン」を人名だと思った。

某公が西安で受験者の名簿を見ると、果たして「夏器通（シアチートン）」という名があった。

「これが尚書閣下のおっしゃられた者か」

試験の終わった後、某公が夏器通の答案を見てみると、文意はめちゃくちゃだし、字の書きまちがえもあって、首席にするにはできが悪すぎる。しかし、尚書の縁故者だと思うと、末席にも置けず、むりやり首席にした。試験結果が発表されると、学生

達はあの夏器通が首席なので驚いた。

「今年の学政は翰林（かんりん）出身だろう。文章を見分ける専門家が、どうして夏器通を首席にしたんだ」

「夏器通には金もなければ、有力者へのつてもないはずだ。いやはや、摩訶（まか）不思議」

皆、色々と憶測（おくそく）したが、誰にもその謎は解けなかった。

某公は都に戻ると、尚書に報告した。

「閣下のご意向どおり、夏器通を首席にいたしました」

しかし、尚書はその名前に心当たりがないようで、あっけに取られていた。

「あの、夏器通（シアチートン）のことですが……」

某公がもう一度そう言うと、尚書はたちまち笑い出した。

「君、とんでもない誤解だよ。あの日は、おならをしただけだよ。私は何も頼んでいないからね」

某公も自分の誤解がわかって、大笑いした。

しばらくして、西安にもこの話は伝わり、学生達は夏器通が首席になったわけを知った。おならのおかげで首席になったことで、夏器通はますます笑い者になった。し

かし、金のにおいをぷんぷんさせて首席の座を買う者よりは、はるかにまともと言えるであろう。

（清『諧鐸』）

叱咤

彭伉と湛賁はともに袁州宜春（江西省）の人である。妻同士が姉妹であった。

彭伉は科挙に合格して進士となったが、湛賁はまだ県の下役人であった。妻の一族が彭伉の合格を祝って、酒宴を開いた。招かれた客は皆、役人や名士ばかりで、彭伉は上座に席を占めた。湛賁も招かれたのだが、宴席ではなく離れに通された。しかも、出された料理は粗末なものであった。しかし、湛賁は怒る様子を見せなかった。

湛賁の妻はこれに憤然として、夫を叱りつけた。

「あなたも男でしょう。こんな辱めを受けて、よくニコニコ笑っていられるわね」

湛賁はハッとした。それから、猛然と学問にはげみ、数年もしないうちに科挙にみごと合格した。

彭伉はいつも湛賁のことを馬鹿にしていた。湛賁が科挙を目指して学問にはげんでいるのを見て、

「やったところでむださ。合格するはずがない」

と言っていた。彭伉が驢馬で郊外を散策していると、使いが湛賁の合格を知らせて

きた。彭伉は、
「あっ！」
と叫んで、驢馬から転がり落ちた。
袁州の人々は、
「湛賁が受かったら、彭伉が驢馬から落っこちた」
と言って笑った。

（五代『唐摭言』）

女学士

北京順天府の某生は家が貧しかった。赤ん坊の時に、飢饉（ききん）に遭って、両親に連れられて洛陽（河南省）へ移り住んだ。絵に描いたような美男子で、気の利いた冗談も言え、手紙にもしゃれた言葉を連ねることができた。しかし、頭は鈍く、十七歳になって、ようやくまともな文章を作れるようになった。しかし、誰も鈍いとは気づかなかった。やがて両親が相次いで死に、天涯（てんがい）孤独の身となった。洛汭（らくぜい）の寺子屋で子供達に読み書きを教えて暮らしていた。

同じ村の顔（がん）氏に娘がいた。名士の末裔であったが、すでに両親を亡くし、寄る辺ない身の上となっていた。たぐいまれな美貌の主で、たいそう聡明であった。父が生前、読み書きの手ほどきをすると、一度ですべて憶えてしまったほどであった。十歳を過ぎた頃から、父から詩を学んだ。父はいつも娘の聡明さをほめて、
「我が家には女学士がいる。しかし、役人になれないのが残念だ」
と言っていた。父は娘をたいそう可愛がり、家柄のよい婿を選ぼうと思っていた。父が死ぬと、母がその意志を継いで、婿選びを続けた。しかし、三年経っても果たせ

ず、今度は母が死んでしまい、娘一人だけが残された。適当な士人に嫁ぐよう勧める者があったので、娘もそうするつもりでいたのだが、まだ決まらなかった。

ある日、隣の秀才の妻が遊びに来て、世間話をした。秀才の妻は紙包みを持参していたのだが、それに字が書いてあった。なかなかの達筆だった。

「それは何？」

「刺繍糸よ」

「いえ、包み紙のことよ」

「ああ、これね」

と言って、隣の妻は紙を広げて娘に渡した。娘が読んでみると、隣の秀才に宛てた手紙であった。文字もすっきりと整い、言葉も垢抜けていた。娘は読み終えると、ため息をついた。

「すてきな文章ね」

「書いた本人もすてきよ。ほれぼれするような美男子なの。あなたと同様、早くにご両親を亡くされてね、村の寺子屋で子供達に教えてるわ。年頃もあなたと同じくらいよ。その気がおありなら、うちの主人に頼んで話を進めてみましょうか」

隣の妻がそう言うと、娘は顔を赤らめ、何の返事もしなかった。

隣の妻は家に帰ると、夫に自分の考えを話して聞かせた。秀才は日頃から某生とは親しくしていたので、早速、このことを某生に話した。某生はたいそう喜び、母の形見の金の指輪を秀才にことづけて、結納代わりに娘に贈った。そして、吉日を選んで婚礼を挙げたのだが、仲の睦まじさはまるで魚と水のようであった。

娘は結婚してはじめて、夫が鈍いことを知った。試験勉強のために書いた文章を読むと、

「この文章を作ったのがあなただなんて、とてもじゃないけど思えないわね。この様子だと、試験にはいつになったら合格できるのかしら」

と笑った。

そして、朝な夕なに自ら厳しく監督して夫に勉強させた。夜になると、机に向かい合って夫のために書物を読んで聞かせ、三更（夜十二時頃）を回ってからようやくやすむのであった。

このようにして一年あまりが過ぎ、某生は試験の必須課題である八股文に精通した。しかし、二度試験を受けて二度とも不合格であった。試験に不合格になる者は多かったが、某生は容貌が美しいばかりに、見かけ倒しとの評判を立てられてしまった。寺子屋の師匠の職も失い、暮らしにも困るようになった。

某生は情けなくて、悔しくて、毎日、家に引きこもって泣いていた。妻はそれを叱りつけた。

「何をいつまでもめそめそ泣いてるの。あなたも男でしょう。人に陰口をたたかれたのなら、見返してやればいいじゃない。私が男だったら、こんな試験、みごと合格して、やすやすと出世してみせるわよ」

某生は気落ちしているところへ、この言葉を浴びせかけられてムッとした。

「家を出たことのない君に、試験のことなんてわかるもんか。役人になるということは、台所で水を汲んだり粥を炊くのとはわけがちがうんだ。君だって試験を受けたら、僕と同じ結果だよ」

「それなら、今度の試験では、私があなたの身代わりになるわ。もし、あなたのように不合格に終わったら、二度と試験のことでとやかく言いませんから」

「君は試験の大変さを知らないんだ。一度、経験してみればいい。ただ心配なのは、君の正体がばれて世間の物笑いの種になりはしないかということさ」

妻がまじめな様子で、

「私は本気よ。あなた、まだ郷里にはもとの家があると言ってたわね。男の身なりをしてあなたと一緒にあちらへ戻って、弟になりすましましょう。あなたは赤ちゃんの時にこちらに移ったのだから、誰にも見破られないでしょう」

と言うので、某生も従うことにした。妻は男物の頭巾と着物を着込んで、

「男に見えるかしら?」

とたずねた。どこから見ても、すばらしい美少年であった。

某生は隣近所を回って暇乞いをした。親しい友人達が少しばかり餞別をくれたので、痩せた驢馬を買って妻を乗せて旅立った。

郷里の順天には、父方の従兄が健在であった。はるばる身内が訪ねてきたものだから、喜んで大いに歓待した。二人の従弟がどちらも珠玉のように美しいので、実の息子のように親身に世話をしてくれた。この若い兄弟達が寝る間も惜しんで勉強する姿に感心し、何くれとなく目をかけてくれた。

近所の慶弔には兄が出かけて行き、弟の方は家にこもって勉強を続けていた。そのため、弟の顔を見た者はほとんどおらず、会いたいと訪れる者があっても、すべて兄が応対した。

弟の文章を読んだ者は、そのすばらしさに目を見張った。中には突然、押しかけてくる者もあったが、弟は一礼しただけで、奥へ引っ込んでしまう。しかし、やがては弟の姿を見た者の口から、その美少年ぶりが伝えられるようになった。そういうわけ

で、弟はその文才と美貌で大いに騒がれ、名家は争って縁談を申し込んだ。従兄がこのことを伝えると、弟はさもおかしそうに笑った。

「まじめな話だぞ」

従兄が真顔で言うと、弟もまじめくさった表情で答えた。

「試験に合格して立身するまでは、妻を娶らないと決めております」

たまたま臨時の試験が行われることになったので、二人は一緒に受験した。兄は不合格であったが、弟は首席で合格し、次の郷試でも第四番で合格した。翌年には進士になり、桐城（安徽省）の県知事の職を授けられ、大いに治績を上げた。ついで河南道の御史に栄転した。その富貴は王侯にも匹敵するほどであった。

やがて、病気を理由に辞職を願い出て、郷里に戻ることを許された。帰郷すると、門前に賓客がつめかけたが、すべて断わって誰とも会おうとしなかった。すでに立身しながら独り身でいるので、人々は不思議がった。しばらくして侍女を置いたが、身の回りの世話をさせるだけのようであった。中には男色を疑う者もあったが、そのようなふるまいは一つとして見られなかった。

まもなくして、明が滅んで、天下は大いに乱れた。そこで、従兄の妻にそっと打ち明けた。

「実は私は某生の妻です。主人が不肖で、いつまでも身を立てることができないものですから、男のふりをして試験を受けたのです。世間に知れて天子様のお取り調べを受け、天下に恥をさらしはすまいかと、そればかり気にしておりました」

そう言って、靴を脱いで足を見せた。靴の中には古い綿がつめてあった。

この時、官位はすでに某生が継いでおり、妻は門を閉ざしてひっそりと暮らしていた。いっこうに身ごもる気配がなかったので、金を出して妾を買った。妻は笑いながら言った。

「たいていの人は身分が高くなると、美女を買ってはべらせるけれど、私は十年も役人になりながら、あなた一人だけよ。あなたは幸せね。何もせずに、美人が手に入るのだから」

某生は答えた。

「それなら君も男妾を三十人ばかり置けばいいよ」

人々はこれを伝え聞いて、笑い話にした。

（清『聊斎志異』）

役人とわいろの巻

頼みごとに袖の下は当たり前！　役人とお金にまつわるお話

掛軸の謎

北京順天府香河県に倪守謙という大金持ちがいた。太守（府知事）の職にあったが、すでに退いて隠居暮らしをしていた。亡くなった本妻との間に長男の善継をもうけ、八十歳で梅先春という若い妾に次男の善述を生ませた。長男の善継は強欲な性格で、腹違いの弟善述の存在を喜ばず、陰でこう言っていた。

「あれが本当に親父の種だかわかったものじゃない。絶対にあれを弟と認めるものか。いつか始末してやる」

守謙もこのことを知っていたので、先春と幼い善述の行く末を案じていた。そして、その心配が高じたあまり、病床に臥せることとなった。守謙は善継を呼び寄せ、後のことを頼んだ。

「善継よ、お前はこの家の跡取りだ。年長で、世故にも長けている。これはかねてから用意しておいた財産目録だ。庭の縁台に至るまで、すべて書き記してある。これをすべてお前にやる。善述はまだ赤子だ。将来、成人したら、嫁をもらって小さな家を一軒と数十畝の田畑を分けて、暮らしに困らないようにしてやってくれ。先春がよそへ嫁に行きたいと言うなら、そうさせてやればいいし、後家を守ると言えば、そのようにさせてやってくれ。どうか先春と善述のことをよろしく頼む」

守謙はそう言って善継に財産目録を渡した。善継が調べてみると、確かに細かいことまで記してあった。これで弟に何もやらないですむので、危害を加える気もなくなった。

先春は赤子を抱いて、守謙の枕元で泣いた。

「旦那様は満八十歳、私は二十二歳、この子はまだ一歳です。財産をすべてご長男にお譲りになってしまったら、この子は成人してからどうやって身を立てていけばいいのでしょう」

「お前は若い。どう身の振り方をつけようと、わしに口出しする権利はない。わしが心配なのは、お前がよそへ嫁に行ってしまったら、善述がどうなるかということだけだよ」

先春は涙ながらに、

「夫の死後、よそへ嫁いだ女はよい死に方をしないと聞いております。それにこの子もおりますのに、どうしてよそへ嫁に行くことなどできましょう」

と言って、再婚しないことを誓った。

「そうか、そこまで決心しているのなら……」
守謙は枕元から掛軸を一本取り出した。
「これはわしの肖像画だ。善継は我が子ながら信用がならん。善述が成人しても何も分けてくれなかったら、賢明なお役人が赴任するのを待ってこの掛軸を調べてもらうように。訴状は必要ない。この掛軸だけを提出しなさい。そうすれば、善述はおのずと富貴になる。くれぐれもこの掛軸のことを善継には知られないように」
一ヵ月後、守謙は息を引き取った。

光陰矢のごとし、善述はいつしか十八歳となり、兄の善継に財産分与を要求した。善継は財産を独り占めにして、善述に分けてやる気などなかった。そればかりか、使用人達の前で善述のことをあしざまに罵った。
「お前がおれの弟だって？　八十歳の爺さんに子供を作ることなどできるものか。おれはお前が弟だなんて認めていないのだからな。親父だって、お前のことを疑っていたのさ。だから、おれに財産を全部渡したんじゃないか。それなのに、お前は厚かましくも財産をよこせというのか？」
先春はこのことを知ると、激しい憤りを感じた。その時、守謙の遺言を思い出した。

その頃、滕志道が新任の副太守として赴任して来たのだが、非常に清廉で洞察力にすぐれているという評判であった。先春は府の役所に掛軸を持参して訴えた。
「私は若くして今は亡き倪守謙に婢女として仕え、善述という息子を生みました。善述が一歳の時、主人は死に、財産はすべて嫡子善継のものとなりました。主人が私どもに残してくれたのは、この掛軸一本だけです。主人はこう言い残しました。
『賢明なお役人にこの掛軸を見せれば、善述は富貴になる』
今、お役人様がたいそう立派な方だと聞き及びまして、こうして訴えにまいりました。どうか、賢明なるお裁きを」
志道が掛軸を広げてみると、守謙が太守の正装をして椅子に端座し、片手で地面を指さしている姿が描かれていた。志道にはこれが何を意味しているのかわからなかった。
志道は官舎に戻ると、書斎の壁に掛軸を掛けて色々な角度からながめた。
「天を指さしているのなら、天意を察してくれ、という意味になるし、胸を指させば、自分の心を察してくれ、という意味だが。地面を指さすというのは、どういうことだろうか。地下にいる自分の心情を察して、家族を助けてくれというものだろうか。いや、これでは抽象的すぎる。幼子に財産を譲ってやるために残した掛軸なのだから、

もっと具体的な意味があるはずだ」
志道は掛軸を前にじっと考え込んだ。ハッと思いついた。
「もしかして、太守が指さしているのは軸ではないだろうか？」
軸をはずしてみると、中から一枚の書面が出てきた。それにはこう書いてあった。

余の嫡子善継は貪欲で冷酷だ。また、妾の梅氏の生んだ幼子善述はまだ数えで二歳。善継は財産を分けたくないがために、この子を害しようとするおそれがある。そこで、田畑すべてと新しい邸二つを善継に与え、邸の右手にある古い小さな離れを善述に与えることとする。その左の部屋には銀五千両を五つの甕に分けて埋めてあり、右の部屋には銀五千両と黄金千両の入った六つの甕が埋めてある。これらをすべて善述に与える。田畑や邸を買う元手とせよ。後に、賢明なる官吏がこの絵を見て、その意味するところを解き明かし、財産を手に入れたならば、善述は銀百両を謝礼とせよ。

志道は金額の多さに驚いた。そして、しばらく何やら考えていたが、やがてポンと膝を打つと、笑みを浮かべて、

「よし」
とつぶやいた。

翌日、志道は先春を役所に呼び出して、こう言い渡した。
「かねてより訴えのある財産分与に関してだが、家族全員の立ち会いのもとに行われなければならない」
そして、先春を帰宅させると、先触れを出して轎を仕立てて倪家に乗り込んだ。
倪家の門前で志道は轎から降りると、突然、虚空に向かってお辞儀をした。
「太守閣下自らお出迎え、かたじけないことです」
あたかも守謙がそこにいるかのように、時候のあいさつなどするのであった。また、大広間でも、
「閣下、先にお掛けくだされ。そんな、そんな、私ごとき若造が先に坐ることなどできませぬ」
などと何度も辞退してから、ようやく腰を掛けた。そして、こう話し出した。
「このたび奥様から財産分与についての訴えがありました。まずはことの仔細をうかがいたいのですが」

じっと耳を傾けて何やら聞き入る様子を見せた。しばらくすると、こう言った。
「はあ、なるほど、ご長男は貪欲だから、財産分けをしたくなさに、ご次男を害するおそれがあったわけですか。ふむふむ、それで、ひとまずすべての財産をご長男に譲られたと。しかしですな、閣下、それではご次男はどうやって暮らしていけばよいのです？」
それからまた、うなずきながら、「ふむ」とか「ほう」とか言っていたが、やがて、
「え？　邸の右手の離れをご次男に。あれが財産になるのですか？」
と言い出した。志道は何か重大な秘密でも打ち明けられたような深刻な顔で、
「そこにある銀は、ご次男にお渡しすればよいのですね」
と言った。そして、今度は驚いた様子で、
「いえ、謝礼だなんて、そんな。私はただ職務を果たしただけです。そんなにたくさんいただけません。まいりましたなあ。まあ、そこまでおっしゃられるのなら、ちょうだいするしかありませんなあ。では、私の方で後ほど証明書をご用意いたします」
志道は椅子から立ち上がると、
「では、右側の離れを見に行くことにいたします」
と言って、深々とお辞儀をした。志道は頭を上げると、驚いた様子で、

「倪老先生はどちらに行かれたのか？　つい先ほどまで私と話していたのに。もしや、あれは倪老先生の亡霊だったのだろうか」
と言った。その場に居合わせた人々は、本当に守謙の亡霊が現われたと思って、恐れおののいた。
志道は善継に右手の古い離れへ案内するよう命じた。離れとは名ばかりで、朽ちかけた少しばかり大きな小屋であった。志道は用意させた椅子に坐ると、善継をそば近くに呼んだ。
「その方の父の亡霊が私にこの家の事情を色々と話してくれた。この古い家を善述にやってくれるように、と言われた。それでよいな」
「閣下のお裁きのとおりにいたします」
「ならば、この家の中のものはすべて弟に与える。そのほかの田畑、邸は今までどおり、その方のものだ」
善継はかしこまって答えた。
「ここにはたいしたものはございません。いずれ取り壊すつもりでしたし、弟にくれてやれば、その手間が省けます」
「そうか。先ほど倪老先生は、左の部屋に銀五千両を五つの甕に分けて埋めた、とお

っしゃられた。これを掘り出して、弟の善述に与えよ、とな」
善継は真に受けていなかったので、
「たとえ一万両あろうとも、亡き父の遺言(ゆいごん)です。弟に与えるのが筋でしょう。争う気など毛頭(もうとう)ありません」
志道は笑った。
「もし争う気になっても、私がそうはさせないからな」
志道が皆に命じて左の部屋を掘り返すと、果たして甕が五つ出てきた。一つにつきちょうど銀が一千両ずつ入っていた。善継は本当に父親の亡霊が出たのだと思い、ふるえ上がった。
「次は右の部屋を掘るぞ。倪老先生の話によれば、甕が五つあって全部で銀五千両入っているそうだ。ほかに黄金千両の入った甕もあるが、これはもったいなくも私に謝礼として下さるとのことだが、そういうわけにもいかぬ。その方ら母子が取ればよい」
善述と先春は志道の前にひざまずいて、感謝の言葉を述べた。
「左の部屋の銀だけでも十分ですのに、その上、右側の部屋にも銀五千両と黄金千両があるとのこと。すべては、閣下のおかげでございます。金の方は謝礼として献上させていただきます」

「本当にあるかどうかはわからないぞ。まあ、倪老先生の亡霊がそうおっしゃられたのだから、うそでもあるまい」
右の部屋を掘ると、甕が六つ見つかり、五つは銀が、一つには黄金がつまっていた。この場に居合わせた人々は、驚きの色を隠せなかった。
志道はこれらの銀がすべて善述と先春母子のものであることを宣言し、証明書を書いた。そして、謝礼として黄金千両を受け取ると、役所へ戻って行った。

守謙がこのような手の込んだことをしたのは、先春が銀の存在を知れば、それを掘り出してよそへ嫁ぐかもしれないと思ったからであった。しかし、まさか清廉という評判の高い志道が一人芝居を打ってまで、謝礼を上乗せして懐に入れようとは思いもしなかっただろう。

（明『廉明公案』）

老教官と三人の娘と甥

浙江湖州は太湖のほとりに一人の年老いた秀才が住んでいた。姓は高、名は広、号を愚渓といった。人柄はまじめで、少々頑固であった。娘が三人あり、皆、すでに嫁いでいた。妻の石氏はすでに死に、息子はなく、高文明という甥が一人いるだけであった。

愚渓は先祖から受け継いだ古い家に住み、文明は別に住まいを構えていた。同姓の甥である文明にも、もちろん同居する権利はあったが、この文明は独立心が旺盛で、自分で身代を築こうと志していた。また、家が老朽化していて修繕の費用もばかにならないので、別に家を買って引っ越してしまったのである。

親族関係から言えば、息子のない愚渓にとって正当な財産の相続人は甥の文明であった。しかし、愚渓はこの話題をなるべく避けるようにしていた。彼は三人の娘をとても愛し、甥に対してはたいそう冷淡であった。愚渓は家庭教師や教官をして得た謝礼を、しばしば娘達にこづかいとして与えていた。後に選ばれて山東費県の教官に任じられた。やがて沂州に転任し、東昌府の教官に昇進して、四、五百両の蓄えを作って湖州に戻った。

金に縁のない人間ほど少しばかり蓄えができると、気分が大きくなるものである。一、二両の銀子を得れば、気持ちの上では十数両も手にした気持ちになる。この時の愚渓がそれであった。彼は意気揚々と湖州に戻ってきた。その様子を見た人々が思い思いに当て推量をしたものだから、愚渓の蓄えの額は実際よりも一けたも多くなっていた。

娘達は父が蓄えを築いたことを知っていたので、その帰還を熱烈に歓迎した。娘達は父の世話をするのは自分だ、と言い張った。

愚渓は心ひそかに喜んだ。

「わしには息子はおらんが、こんなに親身になってくれる娘達がいる。これで老後も安泰だ」

また、こうも考えた。

「そうだ、あの蓄えをどうしよう。別に使うこともないし。いっそのこと娘達に分けてやったらどうだろう。ほうび代わりにやったら、娘達、きっと喜ぶぞ。ますます親孝行にはげむことまちがいなしだ」

そこで、三百両の銀子を取り出すと、娘達に百両ずつ分けてやった。最初のうちは、

娘達も喜んでいた。しかし、蓄えがもっとあるらしいことを知ると、娘達は、
「お父様はあの年になってお金なんか残して、一体何に使うつもりかしら」
と陰口をたたいた。しかし、まだ愚渓には蓄えが残っているはずなので、その機嫌を取ることは忘れなかった。
「お父様のお世話は私がします」
と、争って面倒を見ようとした。
甥の文明は今までと同じように愚渓のところへ顔を出したが、特に機嫌を取ろうとはしなかった。愚渓も文明に義理で少しばかり贈り物をしたが、文明も愚渓のために帰郷祝いの宴を開いたので、貸しも借りも残らなかった。
娘達は数日間、実家に滞在し、それぞれ婚家に戻っていった。愚渓は古い家に一人になった途端、寂しくなった。愚渓は娘達との会話を思い出した。
「お父様、いつでも遊びにきてください。ご自分の家だと思って、遠慮なんてなさらないで」
娘達がしきりに誘うので、愚渓はこう答えたのであった。
「こうまで言われては、行かないわけにはいかんなあ。じゃあ、上から順番に遊びに行くとするか」

娘達とのやりとりを思い出しながら、それでも二日ほど自宅で過ごした。しかし、寂しさに耐えきれず、荷物をまとめると、まず長女の家でしばらく過ごすことにした。それから、次女と三女の家へ順番に行った。
愚渓が顔を見せると、娘達は決まって、
「まあ、もっと早くにいらしてくだされば、いいのに」
と言い、愚渓が帰る時には、
「もう少しいてくだされば、いいのに」
と言うのであった。このようにして娘達の家を二度回った。
娘達はいつ行っても、愚渓を歓待してくれ、一日でも長く自分の家に引き止めようとした。愚渓は考えた。
「わしには息子がいない。この年になって一人暮らしも不安だ。娘達の家を回って暮らせば、何の不自由もないだろう。しかし、ただで食べさせてもらうわけにもいかんなあ。この前、百両ずつやったが、あれでは足りんだろう。残りの金をすべて三人に分けてやったらどうだろう。そうすれば、何も遠慮することなく、娘の世話になることができる。何といっても、年を取って一人暮らしでは、病気にでもなったら、誰にも気づいてもらえないからな。よし、そうしよう」

早速、愚渓が娘達に自分の考えを話すと、皆、喜んで同意した。
「私達はお父様の娘ですもの。何もいただかなくとも、お世話してさしあげるのが当たり前ですわ」
愚渓は身の回りの道具を娘の家に運び込むことにした。家中から三百両あまりをかき集め、娘達に百両ずつ分けてやった。愚渓はすっからかんになったが、娘達の喜ぶ顔を見られて満足であった。
愚渓は娘達の家を回るようになってから、一度も自宅には戻らなかった。ただでさえ古い家はすっかり無人になったため、朽ちる一方であった。こうなっては売ろうにも売れない。娘達は愚渓に言った。
「いっそのこと取り壊して、使えそうなものだけこちらへ運んだらどうでしょう?」
愚渓はいつかは家に戻るつもりでいたので、さすがにそればかりは同意できなかった。しかし、娘達は取り壊した廃材で家の増改築をするつもりでいたので、何のかのと言って愚渓を口説き落とした。実家を取り壊すと、それぞれ廃材を運び出した。誰かが梁(はり)がほしいと言えば、ほかのが柱をくれと言い、果ては豚小屋の仕切り板まで持ち出す始末。本来なら文明の許可を得るのが当然だったのだが、何の相談もなかった。文明自身も争いを避けて、一切口をはさまなかった。こうして、愚渓の家は跡形もなく取り壊されてしまった。

はじめのうちは娘達も歓待していたが、愚渓の手元に何も残らなくなると、だんだん冷淡な態度をとるようになった。愚渓も年寄りのわがままで、あれもいや、これもいや、と言い出し、思いどおりにならないと、
「わしは自分の甲斐性でやってるんだ。お前達に何の迷惑もかけてないぞ」
と、毒づいて、別の娘の家へ行く。どこへ行っても同じことで、これではいくら血を分けた娘でもいやになる。いつしか愚渓は厄介者(やっかいもの)扱いをされるようになっていた。最初のうちは約束よりも早く来ていた迎えも、今では約束の日になっても来ない。仕方がないので、一軒に長居(ながい)をすることになる。すると、当の娘に、
「うちだって手狭(てぜま)ですからね。よそへ行ってもらいたいものだわ」
といやみを言われる。
「どこへ行けと言うのだ。あの家だって、お前達三人で分けてしまったではないか」
と愚渓は懸命に訴えるのだが、娘は相手にしてくれない。こうして、どの娘の家でも、同じ光景がくり返されるのであった。
娘やその夫の言い分はこうであった。

「お年寄りは気配りが足りないから、人にいやがられるんです。世話をする方の身にもなってください」

確かにこの言い分はもっともなような気もする。しかし、愚渓は蓄えをすべて分けてやったのだから、娘達は愚渓の満足のいくようにしてやるのが筋であった。

愚渓の失敗は、娘可愛さのあまり、蓄えをすべてくれてやったことにあった。それば かりか、家まで取り壊してしまった。娘達に言わせれば、

「お金も家もないのだから、私達と我慢して暮らすのが当然でしょう」

ということになる。今や主導権は娘達にあるのだから、思いどおりにいくわけがない。

愚渓はいっそのこと娘達と別居しようかとも思ったが、金はないし、住む家さえない。甥の文明に苦衷を訴えようかとも思った。しかし、冷たい態度をとってきたのに、今さらどの面下げて転がり込むことができよう。愚渓は後悔の涙を落とした。

ある日、愚渓はささいなことで娘と衝突した。愚渓は積もりに積もった怒りを爆発させて家を飛び出したが、誰も引き止めてくれなかった。

「跡継ぎがいないばかりに、こんなことになってしまった。親不孝娘どものおかげで、わしは何もかも失った」

行く当てもないので、路傍の古い廟で休むことにした。思い返せば返すほど、腹が立って仕方がない。

「ああ、人の道を説く儒学者であるわしがこんな目に遭うなんて。これ以上生きていてどうなるというのだ。ええい、死んでやる。死んで、閻魔様にあの親不孝娘どもの罪を訴えてやる」

愚渓は帯を解き、梁にかけて輪を作ると、首を吊ろうとした。突然、

「伯父さん、早まっちゃいけない」

と呼びかけられて顔を上げると、入り口に文明が立っていた。この日、文明は船でこの辺りを集金して回っていたのだが、たまたま廟の近くを通りかかった時に、泣き声が聞こえてきた。その声が愚渓によく似ていたので、船を泊めて廟へ様子を見に行くと、まさに愚渓が首を吊ろうとしているところであった。

文明は愚渓の首から帯をはずし、着物のほこりを払ってやった。

「泣くのをおやめください。体に毒ですよ。一体、何があったのです？　誰かに侮辱されたのですか？」

愚渓は文明に優しい言葉をかけられて、再び泣き出した。ようやく落ち着いてから、

「人に話すのも恥ずかしいことだが、実は娘達に裏切られたのだ。蓄えた金は全部や

ってしまったし、家まで取り壊され、行く当てさえない。誰もわしの言い分を聞いてくれないから、ここで泣いていたのだ。こうなったら死んで、閻魔様にあの親不孝娘達の悪行を訴えようと思ったのだ。まさか、ここでお前に会おうとは。わしはお前に会わせる顔がないわい」

「伯父さん、短気を起こしちゃいけません。そりゃあ、従姉妹だってきつい言葉を投げつけたかもしれませんが、皆、伯父さんの娘ですよ、本気じゃありませんよ」

「わしは死んでもあの三人のところには戻らんぞ」

「戻らないのはいいとして、死ぬことはないでしょう」

愚渓、はなをふきながら、

「わしにはもう帰る家もないのだ……」

と、消え入るような声で言った。

「伯父さん、私には何のとりえもありませんが、人一人を養うくらいの甲斐性はありますよ」

「わしは今までお前に対して伯父らしいことは何一つしてこなかった。それなのに、無一文で転がり込むなんて。そんな迷惑はかけられん」

「だって、伯父さんは僕のただ一人の身内ですよ。迷惑だなんて思うわけないでしょう」

「しかし、お前はよくても、お前の妻はどう思っているか。わしはお前に冷たくしてきたし。さぞかし恨んでいるのではあるまいか」

文明は歯を見せて笑った。

「痩せても枯れても、私は男ですよ。女房一人抑えられなくてどうします？　それに私が言うのも何ですが、あれはなかなかもののわかった女でしてね。伯父さんは私についてきて来ればそれでいいんですよ。何も心配する必要はありません。さあ、一緒に船に乗ってください」

愚渓の返事も待たずに、文明は袖を引っ張って船に乗せてしまった。

文明は愚渓を船で待たせて、一足先に帰宅した。ああは言ったものの、妻が愚渓を引き取ることに同意するかどうかはわからなかったからである。事情を聞いた妻は、愚渓に同情を寄せた。

「伯父様は今、どちらに？」

「船で待ってもらってるよ」

「お気の毒に。伯父様にも面子（メンツ）があるでしょう。早くここに連れてきてさしあげて」

文明はそれが妻の本心かどうか試すために、わざと、

「でもなあ、ただで世話するというのもなあ。伯父さんには鵞鳥(がちょう)の番でもしてもらうことにするか。そうすればただ飯を食わせないですむし」
と言った。すると、妻は文明を叱りつけた。
「あなたの血を分けた伯父様でしょう？　どこに実の伯父に鵞鳥の番をさせる甥がいるの！　伯父様一人食べさせるくらい、どうってことないわよ。くだらないこと言ってないで、早く伯父様を迎えに行っておあげなさい」
「仕方がないな。じゃあ、お酒と料理の用意を頼むよ。伯父さんはたいそう疲れておいでだからね」
文明は妻に追い立てられるように、愚渓を迎えに行った。
愚渓が文明に連れられてその家へ行くと、すでに客間には酒と料理の支度が整っていた。
「伯父様、今日からはここをご自分の家だとお思いになってください」
文明が愚渓に盃を捧げた。愚渓は娘達の非道な仕打ちを思い出しては涙を落とした。そのたびに、文明がなぐさめた。
こうして愚渓は文明の家で暮らすことになった。このことはすぐに娘達の知るところとなったが、誰も、

「お父様、戻って来てください」
とは言ってこなかった。
年末に娘達は、
「お父様、新年を一緒に過ごしませんか？」
と、誘ってきた。これが口先だけなことはわかっていたので、愚渓はすぐには返事をしなかった。すると、文明が言った。
「伯父さん、新年は私達と一緒にご先祖様を拝みましょう。あちらに行ったら、お婿さんの家の先祖を拝まされるだけですから」
「お前の言うのももっともだ。ただ、あっちに長持ちを二つ置いたままなのだ。あれには丸襟の官服と紗(しゃ)の帽子が入っているのだよ。ご先祖様を拝むのに、正装しなければならないだろう。誰か人をやって、長持ちを引き取ってきてもらえまいか」
「それなら、手紙を出しましょう」
文明は人に手紙を持たせて、長女の嫁ぎ先へ行かせた。長女は手紙が来たのを幸い、さっさと長持ちを返してきた。愚渓は憤然(ふんぜん)とした。
「わしに二度と来るなということか！」
新年はたいそう愉快であった。愚渓は年に一度しか袖を通さない官服を着込んで、

これまた年に一度しかかぶらない紗の帽子を頭にのせると、文明夫婦を従えて高氏の先祖を拝んだ。愚渓は先祖に、
「甥は私を実の親のように敬ってくれます。嫁も気立てがよい。これで高氏の将来も安泰です」
と、報告したのだが、ふと不安になった。これほど敬ってくれる文明夫婦に、自分は何を残してやることができるだろうか。今の自分にあるのは、一張羅の官服だけであった。

ある日、愚渓がのんびりと日向ぼっこをしていると、役人がやって来た。役人は愚渓に向かってお辞儀をして、
「ご老人、こちらに高愚渓先生はいらっしゃいますか?」
とたずねた。愚渓が、
「何のご用かな?」
「こちらに愚渓先生がいらっしゃると聞いてきたのですが。大事なお話があるのです」
「へえ、一体何用ですかな?」
「私は福建巡撫の李閣下の命でまいりました。閣下は山東の沂州で、愚渓先生の教えを受けたのです。任地へ赴く途中、こちらを通りかかったので、先生を捜しておいでなのですが、お宅を訪ねてみれば、家がないではありませんか。二日の間、方々捜して、こちらにおいでだと伺い、訪ねてまいりました。ご老人、ご存じではありませんか?」
愚渓は笑って、
「わしがその高愚渓じゃよ」
「本当ですか?」
愚渓は棚を指さした。
「ほれ、あそこに紗の帽子があるじゃろう」
役人は、
「これは失礼いたしました」
と言って、あらためてお辞儀をした。
「李閣下は下のお名前は何文字かな?」
「一文字です」
愚渓は少し考えてからうなずいた。
「思い出したぞ。なるほど、見込みどおり出世したな」

「すぐに閣下がこちらにお越しになられますので、ご対面の用意をなさってください」
役人はそう言って報告しに戻った。
愚渓は文明を呼んで、このことを話した。
「そんなえらい方がわざわざお越しになるということは、きっとよいお話ですよ。伯父さんはその巡撫閣下とはどういうお知り合いなのですか？」
「沂州で教官をしていた時の学生だよ。家が貧しくてな、学費にもこと欠くほどだった。半年あまりも学費を滞納していて、同僚達は請求書を送りつけろ、などと言っていたが、わしは見て見ぬふりをしてやったのじゃよ。後で、家庭の事情がわかったので、わしの一存で学費を免除してやったのだ。将来有為の若者が、貧しさゆえに学問の機会を失うのは惜しいからな。実際会ってみれば、なかなかの人物であることがわかった。試験を受けに行く時には旅費を助けてやったし、彼の優秀さを吹聴して回りもした。二年目には府の学校へ入学を果たした。東昌府に転任してからも、ことあるごとに彼のことを推薦した。こちらに戻ってからは、近況なども聞くことがなくなってしまったから、進士になったことは知っていたが、まさかこんなに出世していたとはのう。老いぼれてからは世事にも疎くなり、李君のこともほとんど忘れておった。普通、わしらのような科挙に挫折した教官を、まともに師匠扱いしてくれる学生なんておらんのだが。彼はわしのことを忘れないでいてくれたんだなあ」
愚渓はしみじみと言った。
「昔の恩を忘れないなんて、立派なお方ですね」
文明もうなずいた。その時、にわかに外が騒がしくなった。立派な船がこちらに向かっているというのである。近所の者達はこぞって見に出かけた。文明が様子を見に外へ出ると、紅い名刺を手にした役人がこちらに向かって来るところであった。愚渓は急いで一張羅の官服を着込み、紗の帽子を頭にのせて、巡撫を迎えに出た。
皆がかしこまる中、船室の扉が開いて李巡撫が現われた。李巡撫は愚渓の姿を認めると、その前にひざまずいた。
「先生、お久しゅうございます」
愚渓はかつての教え子の出世した姿に涙を流して喜んだ。涙だけでなく、はなやよだれまで垂らした。
「さあ、中へ、中へ」
愚渓は李巡撫の袖を捉えて、客間へ連れて行った。李巡撫は客間に毛氈を延べると、愚渓に向かって何度も頭を下げた。
「今日の私があるのは、すべて先生のお導きのおかげでございます」

愚渓はどう答えてよいかわからず、一緒になって頭を下げるばかり。李巡撫は手土産として愚渓に十二両の銀子を贈った。愚渓は文明に受け取らせると、李巡撫に上座に坐るよう勧めた。

「先生、弟子である私が上座に坐ることなど許されません」

李巡撫はそう言って辞退し、愚渓を上座に坐らせた。

「私はひと時も先生のご恩を忘れたことはございません。任地へ向かう途中、ちょうどこの近くを通ることになったので、遠回りしてお訪ねしてまいったのです。まさかこのようなところでお暮らしとは思いもしませんでした」

愚渓は恥ずかしそうに言った。

「ここは甥の家でな。今は甥の世話になってるのだよ」

「先生、ご自宅がおありのはずでしょう？　どうなさったのです」

「いやあ、わしの見通しが甘かったばかりに、家を取り壊す羽目になってしまってなあ。今では行くところがなくて、甥のところに転がり込んでおるのじゃよ」

そう言った途端、色々なことが思い出されて、涙があふれ出た。あわてて拭おうとしたが、間に合わず、顔に二本の涙の筋を作った。李巡撫は何か事情がありそうだと思い、それ以上たずねないことにした。

「先生、もうご安心ください。私が何とかしてさしあげますから」

「おお、ありがとう。その気持ちだけでうれしいわい」

「任地に着いたら、必ず迎えの者をよこします」

しばらく、思い出話をしてから、李巡撫は任地へ向かって出発した。

愚渓は李巡撫から贈られた銀子を、文明に渡した。

「これはお前が取っておきなさい。わしの生活費の足しにはなるじゃろう」

「何を言うのです？　伯父さんのお世話をするのは、甥として当然です。この銀子は巡撫閣下が伯父さんにくださったものなのですから、伯父さんが取ってください」

「しかしな、ずっとただで世話になっているのでは、心苦しいのじゃよ。身一つで転がり込んだわけだからな。お前にこれを受け取ってもらわないと、ここにはおりづらいよ」

文明は仕方なく、

「じゃあ、こうしましょう。半分だけもらいます。半分は手元に残して、お好きなように使ってください」

愚渓もこの言葉に従って、六両ずつ分けた。

李巡撫が愚渓のもとを訪れたことは、この一帯ではすでに噂になっていた。娘達は、

愚渓が李巡撫から贈られた銀子を文明に半分やったことを知ると、
「お父様もひどい。文明にいい顔をさせた上に、お金まで分けてやるなんて」
と悔しがった。

三ヵ月後、福建の李巡撫の使者が愚渓に手紙を届けた。
「是非、先生に福建へお越し願いたい」
手紙には支度金十二両が添えられていた。愚渓は文明にどうしようかと相談した。
「福建は風光明媚なよいところだそうですよ。山水めぐりでもさせてくれるのかもしれませんね」
高齢の愚渓一人では心配なので、文明が同行することになった。支度金をもらいはしたが、福建までの旅費はすべて李巡撫の使者が払ってくれたので、愚渓は一銭も使わないですんだ。
旅は順調で二十日足らずで福建に到着した。この時、李巡撫は視察で漳州に滞在していたので、使者を遣わして愚渓を漳州に呼び寄せた。愚渓が漳州に到着すると、李巡撫が出迎えの行列を従えて待っていた。対面する時もわざわざ人払いをして、愚渓と水入らずで語り合った。そして、地元の役人や有力者を集めて盛大な歓迎の宴を催

した。人々は愚渓のことを知らなかったが、李巡撫との親密な関係を見て、大きな影響力を持つ人物だと思った。利にさとい者は、早速、贈り物を持参して、愚渓のもとへご機嫌伺いにつめかけた。愚渓に李巡撫へのとりなしを頼もうと思ってのことであった。
しかし、当の李巡撫は宴の翌日には別の地へ視察に出かけてしまい、その後は愚渓と顔を合わせることはなかった。常に距離を置くことで、愚渓が何を頼まれようと、自分へのとりなしができないようにしたのであった。
半年後、李巡撫は報告のため、一度、都へ戻ることとなった。李巡撫は半年ぶりに愚渓と対面した。
「先生も故郷が懐かしくなられたでしょう」
愚渓も湖州へ戻ることにした。福建に滞在した半年の間に、愚渓は二千両あまりもの銀子を手に入れた。帰る時にも山のような贈り物をもらった。以前、山東で教官をした時の四倍近くもの蓄えを、働かずして作ったのであった。
愚渓が福建でたいそうな蓄えを作ったという噂は、またたく間に広がった。近隣の人々が見物がてら出迎えると、確かに山のような荷物を積んだ車が何台も続いていた。
三人の娘も早速、押しかけてきた。娘達は満面に笑みを浮かべて、愚渓に言った。

「長旅でさぞかしお疲れになられましたでしょう。お父様のお世話は私達がしますから」

愚渓は冷ややかに笑った。

「わしの荷物を見て、また世話をする気になったのか」

娘達は皮肉を言われても聞こえないふりをして、父にまとわりついた。愚渓は娘達の変わり身の早さにうんざりした。荷物から包みを三つ取り出して、娘達に一つずつ渡した。開いてみると、銀子が十両入っていた。

「これは年寄りからのほんの気持ちだ。もう二度と押しかけてこないでくれ」

また、愚渓は一枚の書類を取り出すと、文明と娘達に読むように言った。それにはこう書かれてあった。

「無一文の年寄りを甥は引き取ってくれた。最初の蓄えはすべて娘達にやったが、このたびの蓄えは、すべて甥の文明に譲ることとする」

娘達はこの書面を読むと、顔を真っ赤にした。そして、十両入った包みを懐に押し込み、それぞれ婚家に逃げ帰った。

（明『二刻拍案驚奇』）

誓い

ある役人、汚職が過ぎて、弾劾罷免（だんがいひめん）の上、処罰されそうになった。幸い、大赦（たいしゃ）に遭い、もう一度、役人になることができた。この時、彼は天に一つの誓いを立てた。

「今後は他人から金品を贈られても、一切、受け取りません。受け取ることがあれば、罰を下してください。左手で受け取れば、左手をただれさせ、右手で受け取ったなら、右手をただれさせてください」

しばらくして、訴訟を起こした者がいた。その者は有利にことが運ぶよう、役人のもとに百両の銀子を持ってきた。役人は固辞した。

「それだけはだめだ。私は天に誓いを立てたのだ。その銀子を受け取ったら、私の手がただれてしまう」

そうは言ったものの、銀子への誘惑は断ち切れない。そこで、こうつけ足した。

「しかし、せっかくだからな、とりあえず、靴の中にでも入れておいてもらおうか」

（明『解慍編』）

新任

はじめて県知事に任命された役人がいた。新知事は何人もの知事につかえてきた年老いた下役人にたずねた。

「知事はどうすればよいのだろうか」

下役人が答えた。

「一年目は清廉に。二年目は少しだけ清廉に。三年目になれば、わいろをとってよろしい」

新知事はため息をついた。

「何と、三年目まで待たなければならないのか」

（明『解慍編』）

銭愚兄

両江総督の百齢は清廉を旨とし、属官からの金品の贈与を一切受けつけなかった。六十歳を過ぎてはじめて息子が生まれた。嘉慶帝は百齢の子に扎拉芬という名を与え、五品官を授けた。扎拉芬とは満洲語で「福寿」を意味した。

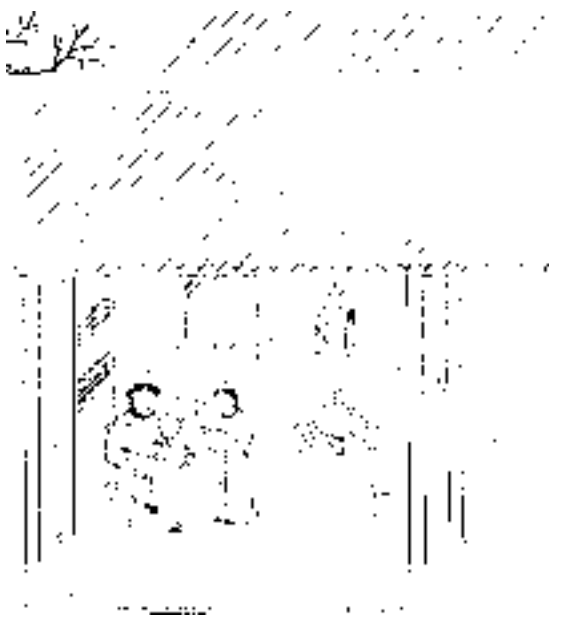
属官達は競って百齢に祝いの品を贈ろうとしたが、すべて退けられた。

江寧府知事の銭なにがしは子供用の小さな官服と、水晶の頂戴をつけた官帽、珍珠を連ねた朝珠、たくさんの金銀の玩具を作らせ、のしに「愚兄銭某」と署名し、公子への祝いの品であることを強調した。そして、門番にわいろをつかませ、百齢に届けさせた。その際、こう言わせた。

「のしにもありますように、これは若様への贈り物です。どうか、お退けになられませんよう」

百齢は笑って納めた。

同僚達はこのことを知ると、こぞって真似し、のしに「愚兄」と署名して祝いの品を贈った。このため、「銭愚兄」の名は両江中に知れ渡ることとなった。



（清『香飲楼賓談』）

態度を変える

裴佶（はいきつ）の伯母の夫はたいそう人望のある大臣であった。

ある日、裴佶が伯母を訪ねると、ちょうど大臣が参朝を終えて戻ってきた。大臣はたいそう怒っていた。

「崔昭（さいしょう）とは一体、何者だ。誰もが口をそろえてほめそやしおる。大方、皆にわいろを配っているのだろうて。こんなことでは、天下はどうなる？」

その言葉も終わらないうちに、門番が来客を取り次いだ。

「寿（じゅ）州の崔知事がお見えです」

大臣は名前を聞いた途端、怒り出した。

「そんなやつを取り次ぐな」

門番を叱り飛ばし、むち打とうとした。しかし、追い返すわけにもいかないので、いやいや身支度を整えて、客間へ出て行った。伯母は心配した。

「変なことをしなければいいのだけれど……」

しばらくして、

「一番よいお茶をお出しせよ」
と、大臣は命じた。次いで、
「酒と料理の用意だ」
さらには崔昭の馬にまぐさをやり、下僕にも食事を出すよう命じてきた。裴佶の伯母は不思議がった。
「あんなに怒っていたのに、一体、どうしたのかしら？」
しばらくして大臣は戻ってきたのだが、先ほどとはうって変わって、上機嫌でニコニコしている。大臣は裴佶に気づくと、
「書斎で休んでおいで」
と、部屋から出て行かせた。裴佶は書斎に行きかけたが、大臣の態度の変わりようの理由を知りたくて、扉の前をウロウロしていた。すると、大臣が懐から紙を取り出して、伯母に見せながらこう言っていた。
「崔昭は立派だな。このわしにも御用の絹を千匹贈ってくれたぞ」

（唐『唐国史補』）

十万貫の銭

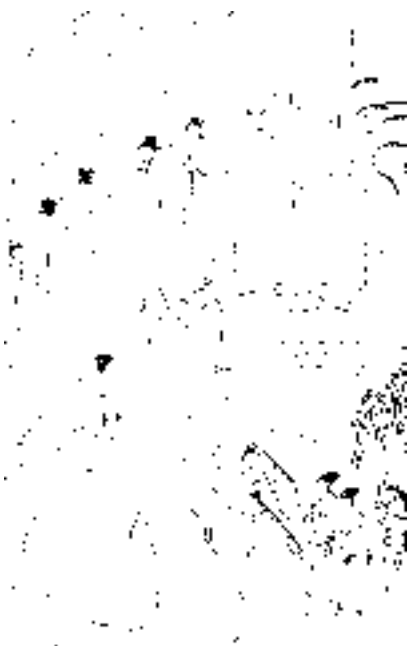
宰相の張延賞（ちょうえんしょう）が度支使（たくししし）を兼任して財政をつかさどることとなった。長らく未決になっている案件が、実はまったくの無実の罪であることがわかった。そこで、部下を集めて、
「この案件を十日以内に調べ直せ」
と申し渡した。
翌日、彼が執務室へ行くと、机の上に一枚の紙切れがあった。紙には、
「銭三万貫で、この件を不問に付してほしい」
と書かれていた。張延賞は激怒して部下を叱咤（しった）した。
翌日、また机の上に紙切れがあり、
「銭五万貫」
とあった。張延賞はますます怒って、二日以内に調査結果を出すよう命じた。
翌日、また紙切れがあり、
「銭十万貫」

と書いてあった。張延賞はとうとうこの件を不問に付すことにした。

側近が理由をたずねると、こう答えた。

「銭を十万貫積めば、神仙だって買収できる。これだけ払える相手なら、できないことはないというわけだ。私もさすがにこわくなったのだ」

（唐『幽閑鼓吹』）



干支

干支が鼠の県知事がいた。その誕生日に下役人達が金を出し合って、金で鼠の像を鋳（い）て贈った。県知事は大喜びで受け取り、こう言った。

「どうもありがとう。ところで家内の誕生日が近いのだが、こちらは丑（うし）年だからな。よろしく頼むぞ」

（明『笑府』）

官職を買う

保定（河北省）に住む監生が金を納めて県知事の官職を手に入れようとした。上京の準備にとりかかった矢先に、病で一月あまりも寝込んだ。

ある日のこと、突然、下僕が来客を告げた。監生は病気で寝ていることも忘れて、走り出て客人を迎えた。客人のまとった華麗な衣服は、その身分の高さをうかがわせるものであった。監生がその来意をたずねると、客人はこう答えた。

「私は公孫夏と申します。十一皇子殿下の食客です。あなたが県知事の官職を得るために上京なさると伺い、訪ねてまいりました。本当に役人になりたいのでしたら、府知事の方がよろしくはありませんか」

監生がへりくだって、

「資金があまりないので、ぜいたくな願いは抱かぬようにしております」

と断わると、客人は、

「私は是非、あなたのお力になりたいのです。お金が足りないのなら、半分だけ先に納めて残りは任官してからでもようございますから」

と言う。監生はうれしくなって、その方法をたずねた。

「総督とも巡撫とも、懇意にしております。そうですね、五千貫もあればこと足りるでしょう。ちょうど真定府（河北省）の知事に欠員が出ておりますから、急いだ方がよいですよ」

「真定なら無理ですよ。あなたもご存知でしょう、出身地の省の役人にははなれない決まりになっておりますから」

監生がいぶかしがると、客人は笑ってこう言った。

「決まりはあくまでも決まりですよ。肝心のものさえあれば、出身地であろうとどこであろうと、構いはしないんですよ」

そうは言われても、監生には納得がいかない。二の足を踏んでいると、

「疑わないでください。本当のことをお話しましょう。実はあの世の城隍神の欠員なのですよ。あなたの寿命はまもなく尽きます。すでに死者の戸籍にも名前が載っています。どうせ死ぬのですからね、今のうちに工作しておいてもいいではありませんか。そうすれば、あの世へ行ってから富貴を得られますよ」

と言う。監生が驚いていると、客人は、

「あなたご自身のことです。よくお考えください。と言ってもあまり時間は残ってお

りませんが。三日後に、またお目にかかりましょう」
と言い残して、帰って行った。
監生は眼を覚まし、ようやくすべてが夢であったことを悟った。妻に今生の別れを告げ、蓄えておいた銀で紙銭一万貫を買い入れた。そのため、街中の紙銭は一枚もなくなってしまった。監生は紙銭を庭に積み上げると、紙で作った人形や馬と一緒に焼いた。何しろ大量なものだから、昼夜ぶっ通しで焼き続け、山のような灰が残った。
三日後、客人は約束どおり訪ねてきた。
監生が金を渡すと、客人は監生をとある役所へ連れて行った。殿上に高官が坐っていたので、監生はひざまずいて拝礼した。高官は監生の姓名をたずねた後、
「清廉にして慎み深くあれ」
と訓戒を垂れた。それがすむと、監生を机の前に呼び寄せて辞令を手渡した。
監生はこうして晴れて役人になったのだが、ふと考えた。そもそも監生出身の役人は進士出身に比べて、かなり低く見られている。ここは一つ車馬や衣服を華やかにして、部下を威圧してやろう。そこで、多くの車馬を買い込んだ。また、一人では寂しいので、下役人を家に遣わして、日頃から寵愛している美しい妾を迎えさせた。
すべて手はずが整ったところへ、真定からの儀仗が到着した。監生は意気揚々と任地の真定へ向けて出発した。一里ほど行ったところで、突然、先払いの銅鑼の音がやみ、旗が倒された。何事かと思っていると、先導の騎馬の者が皆、馬から降りて路傍に平伏している。見る見るうちに、人は一尺ほどの身の丈に、馬は狸ほどの大きさに縮んでしまった。
供回りの驚き叫ぶ声が聞こえた。
「関帝（関羽）様がおいでになられた」
監生はあわてて車から降りて平伏した。遠くに関帝が四、五騎を従えて、手綱をゆるめてゆっくり近づいてくるのが見えた。黒く、つややかなひげが頬を覆い、眼は切れ長で耳の際に届くほど。その姿は、まことに神々しく、威厳に満ちていた。
関帝は監生をちらりと見てたずねた。
「この者は何者だ」
「真定府の新任の知事でございます」
従者が答えると、関帝はいまいましそうに言った。
「府知事ふぜいがこれほど仰々しい儀仗をするのはいかがなものか」
監生はこれを聞いて、体中の毛が逆立つ思いがした。縮こまっているうちに、本当に体が縮んでいき、気がつけば、六、七歳の子供くらいの大きさになっていた。

「立つがよい」
関帝はそう命じて、馬の後ろに随わせた。路傍に立派な御殿があり、関帝はその中に入ると、南に向かって坐った。そして、筆と紙とを監生に与えて、その本籍と姓名を書かせた。監生が書き終わってさし出したのを見ると、関帝は顔を真っ赤にして怒った。
「字はまちがっているし、形になってはいないではないか。さてはこやつ、市井の悪徳商人だな。こんな者に民と社稷をまかせられるものか」
そして、従者に命じて監生の生前の行いを調べさせた。傍らの一人が何やら報告すると、関帝は声を荒げた。
「金で出世を買う罪は軽いが、官位を売った罪は重いぞ」
関帝の命を受けて、金の甲冑をつけた神将が鎖を手にして外へ出て行った。また、別の二人が監生を捕らえて官服をはぎ取り、むち打ち五十を加えた。監生は尻の肉が裂けるほど打たれてから、外へ放り出された。
見回すと、車も馬も消えていた。監生は尻の痛みのために歩くことができず、草むらに横になって休んだ。よくよく見てみれば、どうやら自分の家からあまり離れていないところであることがわかった。尻はまだ痛かったが、体は木の葉のように軽く感じられたので、一昼夜ほどで家に帰りついた。
気づくと、寝台でうなされていた。家族に話を聞いてみると、監生は長らく意識を失っており、突然、昨夜から、
「尻が痛い、尻が痛い」
とうめき出したという。すでに七日も経っていた。
「阿憐はどうしていないのか?」
阿憐とは妾の幼名であった。家族の話によれば、阿憐は昨夜、突然、
「旦那様が真定府の知事になって、お迎えをよこされましたわ」
と言い、部屋にこもって化粧をし、晴れ着に着替えた途端、死んでしまったという。監生は胸を打って嘆き悲しんだが、あるいは息を吹き返すかもしれないと思い、
「しばらく埋葬は待つように」
と命じた。しかし、数日経っても、阿憐が息を吹き返すことはなかった。
監生の病は徐々に快方に向かった。しかし、尻の傷はなかなか治らず、半年も立ち上がることができなかった。
監生はことあるごとにこう自分に言い聞かせた。
「官位を買う金は使い尽くしてしまった。その上、あの世で罰まで受ける羽目となっ

た。しかし、これはまだ耐えられる。耐えられないのは、かわいい阿憐がどこへ連れ去られたかわからないことだ。静かな夜には、阿憐のことが思い出されてたまらない」

（清『聊斎志異』）

立ち読みはここまで